Osaka University Knowledge Archive

Title	時空と認知の言語学XI　（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88368
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト2021

時空と認知の言語学XI

王　　周　明
高　橋　克　欣
瀧　田　恵　巳
田　村　幸　誠
春　木　仁　孝
渡　辺　伸　治

大阪大学大学院言語文化研究科

2022

言語文化共同研究プロジェクト 2021

時空と認知の言語学XI

目次

王　周明
中国語教科書に見る「中国語」および「中国」
―1950 年代後半～80 年代前半中国原編日本改編のものを中心に……....1

高橋克欣
時況節の位置と談話解釈上の機能-quand 節と comme 節の分析……11

瀧田恵巳
指示詞の体系を構成する二つの意味基準について.....19

田村幸誠　松浦幸祐
方言習得に関する一考察：
非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に……....29

春木仁孝
現代フランス語の là の機能について.....39

渡辺伸治
現代語版ルター聖書/現代語版チューリヒ聖書における gehen/kommen
―マタイによる福音書を対象に―……49

中国語教科書に見る「中国語」および「中国」
―1950年代後半～80年代前半中国原編日本改編のものを中心に―[1]

王　周明

1. はじめに

日本では、江戸時代の唐話学習から今日まで、広義的な中国語コミュニケーション能力を向上させるという目的から、中国語教本[2]は色々な形式で刊行され、その種類は二千を超えている。一方、1945年終戦後から1972年日中国交正常化までの三十年間近くの間、日本国内の中国語教育にとっては、主な発信先となる中国本土より直接入手可能な新しい情報が極めて限られていたため、停滞というほどではないかもしれないが、発展や前進という意味では非常に困難な時期にあったことは想像に難しくないだろう。

こうした状況の中で、転機を迎えたのは、中華人民共和国建国後、中国発外国人留学生用の最初の中国語教科書と言われている、1958年10月に中国の時代出版社による『汉語教科書 Modern Chinese reader』上下2冊の上梓である。この教科書は早くも日本に伝えられ、中の本文、例文および練習問題以外、新出単語に日本語の訳語・説明文の中国語原文が残るまま段落毎に日本語の訳文が付け加えられ、1960年11月に光生館によって日本語版『中国語教科書』上下2巻として刊行された。さらに、1969年に説明文の中国語原文を全部削除して上下2巻まとめて『合本　中国語教科書』一冊として再刊された。

『中国語教科書』の初刊行から十二年後、中国発専ら日本人学習者向けに作成した最初の中国語教科書『简明汉语三十课』は1983年3月に光生館によって出版された。本稿の執筆に当たって確認できた、『中国語教科書』上巻の1962年版にあった「昭和37年4月20日第5刷」、『中国語教科書』下巻の1961年版にあった「昭和36年5月20日第4刷」、『合本　中国語教科書』の1987年版にあった「昭和62年2月25日17刷発行」および『简明汉语三十课』の1990年版にあった「1990年2月15日12刷発行」という記録からその優れた利用実績を伺い知り、両者とも実質上当時のロングセラーと呼んでも過言ではなかろう。

植田2021：63は以下のように指摘している。

> 外国語テキストは、執筆者が学習者に教えよう／伝えようとするその言語とそれにまつわる事柄が盛り込まれて編纂されている。多文化理解等の名のもと以外の情報も盛り込まれ、これらはしばしば「文化」ともよばれる。学習者は執筆者の目を通して目標言語を取り巻くものとしてそれらの「文化」に接することになる。…
>
> …執筆・出版関係者の意識が選択的・複合的に学習者に「文化」として提供

---

[1] 本稿は科学研究費基盤研究B「異文化理解における外国語教科書の役割ー中国語・ロシア語・朝鮮語を対象としてー」（課題番号19H012820）による研究成果の一つである。

[2] 中国語教本には、授業用の一般教科書の他、独習書や辞書なども含まれる。

され、学習者の目標言語観や当該言語文化圏観の形成にも影響を及ぼすと考えられる。

『中国語教科書』の初版から『简明汉语三十课』の初版まで、時期的に 1950 年代後半～80 年代前半、つまりおおよそ中国建国初期～改革開放初期に相当する。（？半）閉鎖的状態から経済的に開放しようとする中国は如何に外国人学習者への中国語教育を通して海外へ発信してそしてコミュニケーションを取ろうとするかを知るには、中国語教科書に基づいて検討するのは一種の有効かつ有意義な方法ではないかと考え、本稿では、『中国語教科書』と『简明汉语三十课』に見る 1950 年代後半～80 年代前半の「中国語」と「中国」について、言語本体と編集事情の両方から検討を試みる。

2. 二種の教科書に見る中国語の変化

2.1. 教科書の構成概要および位置付け

『中国語教科書』は説明、緒論、全 72 課、基本的文法の復習要綱、幾つかの付録[3]から構成され、全 72 課のうち、第 1～8 課は「語音」に関する内容、第 9～12 課は「口語練習部分」、第 13～72 課は「基本的文法」となっている。そして、編集者によるその学習目標設定については、上記発音内容と文法内容が教科書全体に占める割合からも分かるように、自ら発音と文法の教材と位置付けられ、「この本を修了した学生は発音と基本的文法のほかに，864 の単語(746 の漢字を含む)をおさめたことになり，簡単な口語で日常生活の用をたすことできるばかりでなく，わかりやすい文章を読みこなし，さらに進んで短い論文を学ぶことができるはずである。」[4]になっている。

『简明汉语三十课』は序、まえがき、凡例、本文に入るまえの課（発音＋漢字)、第 1～30 課、「词汇总表」から構成され、第 1～30 課は本文＋文法（＋補充）から構成されている。そして、編集者はこの教科書の性質を「中国語を学習する日本人のために編んだ簡明な基礎中国語テキスト」[5]と明記し、その内容構成の特色を「中国語の基本的な文法のほとんどすべてが盛りこまれている。テキストの本文は口頭語を主としており，いきおい会話を占める比重が大きいが，内容が生活の各方面にわたっており，会話の能力を高めるのに一定の効果をあげることができるはずである。」[6]と説明し、さらに日本人学習者にとっての一番の難点

---

[3] 1960 年版と 1969 年版の付録の数と内容が異なる。1960 年版の 4 つの付録のうち、付録 2「漢字とその組み合わせ一覧表」、付録 3「本字と略字の対照表」と付録 4「語の連記の規則」は 1969 年版になくなる。1969 年版の 6 つの付録のうち、付録 2「主要語彙索引」、付録 3「事項・術語索引」、付録 4「語法関係用語対照表」、付録 5「簡化字表」と付録 6「偏旁簡化表」は新たな追加。

[4] 『中国語教科書』の「説明」部分（まえがきに相当する）による引用。

[5] 『简明汉语三十课』の凡例 1 による引用。

[6] 『简明汉语三十课』のまえがきによる引用。

として、「各種の補語が日本人にとっては，中国語を学習する上でのポイントであり，学習者はあらゆる機会をとらえてくり返し練習し，中国語の「補語概念」をマスターすることが最も望ましい。」[7]まで指摘している。

2.2. 『中国語教科書』に見る拼音（ピンイン）表記と簡体字

『中国語教科書』の画期的な意義の一つはまさに新しい音声表記法と簡略化漢字を採用したことにある。この 2 項目は 1960 年前後において、外国人学習者にとって前代未聞のものだけでなく、中国人にとっても斬新なものだった。

2.2.1. 拼音表記の採用およびその社会的意味

この新しい音声表記法は拼音（ピンイン）と言い、ローマ字のアルファベットと声調記号で中国語の共通語の漢字の読み方を表し、今日世界中の外国人中国語学習者が中国語の発音を学習する際に必ず利用する方法となっている。

拼音以前の正式な音声表記法は漢字の古い形に基づいて作られ、1918 年に制定された注音符号である。注音符号もすでに完成度の高い音声表記だが、やはり中華民国の大陸時代の国語政策の一環になっているため、当時の中国では代替されたいものとなった。そこで、1958 年 2 月 11 日の第 1 期全国人民代表大会第 5 回会議で漢語拼音法案[8]が採択され、『中国語教科書』の編集者も採択の半年後いち早く発音内容に採用した。

但し、漢語拼音法案が採択されたのと同時に、『全国人民代表大会が漢語拼音法案に関する決議』[9]も可決され、「漢語拼音法案は漢字を学習する共通語を普及するための補助的道具として、先ず師範学校と中小学校で教習し、教習経験を積み重ね、同時に出版業などでも逐次普及し、実践の過程において法案の更なる改善を求め続けるべきだ。」[10]という内容が含まれている。結局 2 月の漢語拼音法案の採択から 8 月の『中国語教科書』の編集完成まで、半年間という短い経過時間を考えると、師範学校と中小学校での拼音教習実践活動と並行するというより、むしろ中国語教科書の出版のほうが先行した事実を認めざるを得ないだろう。また、視点を変えれば、国内建設より国際連盟国を優先する中国政府側の一貫の姿勢をここからもある程度推察できるだろう。

2.2.2. 繁体字・簡体字の使用概況に見る漢字簡略化の実態

---

[7] 『简明汉语三十课』の凡例 8 による引用。

[8] 中国語原文：汉語拼音方案

[9] 筆者訳。中国語原文：全国人民代表大会关于汉語拼音方案的决議

[10] 筆者訳。中国語原文：汉语拼音方案作为帮助学习汉字和推广普通话的工具，应该首先在师范、中、小学校进行教学，积累教学经验，同时在出版等方面逐步推行，并且在实践过程中继续求得方案的进一步完善。（筆者追記：中国語原文には一部簡略化されていない繁体字も使用されているが、ここでは簡体字に統一した。）

1956 年 1 月 28 日に漢字簡略化法案[11]が国務院によって公布されてから『中国語教科書』の編集完成まで、4 回にわたって 517 の簡化字が発表され、全国の新聞・雑誌・図書に正式に使用されていた。『中国語教科書』もこれらの簡化字を使用している。[12]

こうした中で、『中国語教科書』の漢字使用状況からも分かるように、2 年半以上の時間が掛掛かって 517 の簡体字が出来ていても、数膨大の漢字からしてまだまだ足りない。1960 年版『中国語教科書』の段階では、大ざっぱに調べにより、下記の状況が明らかになってきた。例えば、

・食偏の漢字、言偏の漢字、馬と馬偏の漢字、門および門構えの漢字、見と見を含む漢字、貝と貝を含む漢字、昜を含む漢字は簡体字になっていない。

・糸偏・金偏の漢字、車および車偏の漢字は、「練／繼／鐘／輛」が「练／继／钟／辆」に取って代わられた以外、繁体字のままになっている。

要するに、この時期、関連する漢字が多いため、偏旁の機能を兼ねる漢字の簡略化には慎重な態度が示される様子だった。それにしても、漢字簡略化の作業がやはり進められ、1969 年版『中国語教科書』になると、偏旁の機能を兼ねる漢字の簡略化はほぼ完了して、その状況が付録 5「簡化字表」と付録 6「偏旁簡化表」に反映されている。

中山時子・戸村静子 2001 は拼音と簡体字の普及意義を中国国内の状況に着目して下記のように評価している。

> 中国では解放の前後を問わずその近代化を阻むものの一つに、漢字の学び難さと方言群の複雑さとがあった。…漢字の簡略化、共通語の制定、簡体字にローマ字による発音記号を綴り合わせて注音し、共通語の普及を計る…「漢語拼音法案」の公布となり輝やかしく結実する。大衆にとって漢字は学びやすくなり、共通語は拼音を媒体として普及し、方言群による近代化への停滞は昔話となった。[13]

母語話者の中国語習得とは異なり、外国人学習者向けの中国語教育にとって、拼音と簡体字の習得は中国語学習の重要な一環とは言え、ウォームアップにも相当する。その後の語彙表現を文法ルールのもとでの正確運用こそが正念場になる。

2.3. 語句表現に見る時代的色彩の変化

2.3.1 人間関係の面において

(1)『中国語教科書』の中で、親族呼称の言い方は全く出現せず、人間関係に関係する語としては、「同志」「先生」二語は最も高い頻度で使用されている。

「同志」は時代語として、長期間にわたって使用されている。殆どの辞書では、「同志」の使い方について、中国人相互間の呼び方、名前・役職名・職業などにつけて用いるという

---

[11] 中国語原文：汉字簡化方案

[12] 『中国語教科書』の「説明」部分による。

[13] 中山時子・戸村静子 2001：pp.4-5 による引用。

類いの説明になっている。しかし、本教科書では、「班上的工作同志（＝クラスの役職を担当するもの）就把他介紹給我了。」（第 48 課の課文 2）「合作社的工作同志（＝協同組合の店員さん）把糖给我包起來了。」（第 53 課の例 13）さえ「同志」を付けられたのに対して、数回も出ている農民の話しでは、どの場面でもストレートで「农民」となり、「同志」の言い方が全く使用されていない。農民が職業ではなく、階層や身分を表し、つまり、農民に対する差別が一般民衆の間に暗黙的に存続している故だろうか。

「先生」は主に後の中国語「老師」に取って代わられる、教鞭を執って人々に教えるものに使用されるが、ちょっと文脈が曖昧になって高名な学者や知識人などに対する敬称として用いる可能性が存在する箇所もしばしばある。例えば、「先生从礼堂前边儿过去了。」（第 52 課の例 2）、「先生叫我念下去。」（第 53 課の例 14）など。いずれにせよ、伝統文化よりの継承である。『中国語会話初級』と『简明汉语三十课』になると、「老師」が教鞭を執るものを指し、「先生」は外国人男性に対する敬称に変わった。

(2)『简明汉语三十课』では、親族呼称をはじめ、非常に豊富な人間関係の関連語を提示している。「爸爸／妈妈／哥哥／弟弟／老爷／祖母／兄弟／姐妹／亲戚／家属」のほか、「小姐／太太／先生／夫人」などもある。

2.3.2. 日常生活場面において

(1)『中国語教科書』に見られる日常生活場面が非常に限られており、娯楽・体育に関係する語句として「跳舞／唱歌／看电影／演电影／演員／话剧／音乐会／票／首都剧場／人民剧場／溜冰／颐和园」が挙げられたが、何処までは一般民衆にも簡単に実現できるかのことを考えると、一層理想図のように思われるだろう。

買い物に関係する語として「糖／水果／鉛笔／鋼笔／本子／百貨大楼」のほか、「进城／城里／城外／合作社」が特に印象的である。「进城／城里／城外」は関連語彙で、口にしないといけないような出来事を連想させる。例えば、「你在城里看了电影没有？」（第 27 課の課文 3）「同屋进城用了十块钱。」（第 62 課の練習 3）「合作社（＝協同組合）」も時代語の一つである。普段の買い物でしたら、「合作社」は欠かせない唯一の買い物先のように目に映り、例えば、「学校的合作社也有鋼笔卖」（第 43 課の課文 2）、一般店を指す「商店」はなかった。『中国語会話初級』と『简明汉语三十课』になると、「合作社」がなくなり、「商店」が代わりに買い物の場面に登場している。

移動手段の関連語として出ている「船／飞机／自行車」とは別に、「汽車」は普通乗用車の意味のほか、バスの意味でも色々な文例に用いられている。例えば、「劳駕，这辆汽車是去哪儿的？」（第 32 課の課文 1）「这种最新的大汽車坐得下八十人。」（第 58 課の例 12）『中国語会話初級』と『简明汉语三十课』になると、「車」に分類が行われ、「公共汽车／出租汽车／火车／软卧／硬卧／餐车」のように、語彙表現の正確度も上がっている。

(2)『简明汉语三十课』では、北京市内の天安門広場観光に合わせて中国祝祭日をまとめて提示、瑠璃廠での買い物に合わせて文房具名称を追加、郊外の万里の長城遊覧に合わせて

外出手段を紹介、天気についての雑談に合わせて天候関連語を紹介、電話を掛けるや電報を送るシーンに関する郵政用語の補足、レストランでの食事に合わせて料理名の紹介、試合の観戦に競技名の提示、京劇の鑑賞に合わせて芸術関連語の紹介、診察のシーンに関係する医療用語の補充など、多様多彩な生活場面が用意され、それぞれ弾ける会話が出来そうな語句表現が提示され、枚挙に暇がない。北京以外の上海などの都市も年長者の誕生日祝いも視野に入れて触れてみた。

2.3.3. 中国対外国の関係について

外国人学習者向けの教科書として編集できたが、編集者側が学習側の諸般事情を実際に何処まで想定できたのだろうかについては、相手国との関係に影響された場合が多い。それ故、相手国との関係もある程度教科書の内容を通して現れる。

(1)『中国語教科書』は冷戦が続く厳しい政治的環境に囲まれる中で編集できたが、そこに見る「外国」の概念を言語化すれば、語彙的に抽象的な「外国」と具体的な「苏联」、「俄文」に二分される。一方、文例においての「外国」は具体像を持たず、中国と何らかの関係を持つという殻以外、中身を感じてもらえない存在となっている。

他說中国話，說得跟中国人一样，我没有听出来他是外国留学生。（第 53 課の例 20）

我们可以看到最新的、外国（的）进步（的）电影。（第 60 課の例 19）

到中国来访问过的外国朋友都很喜欢北京。（第 70 課の例 5）

他方では、「苏联」、「俄文」が含まれ文例が多数あり、他国や他言語を触れる文例は一つもない。そこで、国籍を聞けばソ連人と返事、外国のメディアと言えばソ連の新聞・雑誌・図書、外国の娯楽と言えば、ソ連の映画・歌が独り占め、外国語（専門）と言えばロシア語、来中留学生と言えばソ連学生、外国（留学）に行くとすれば、行き先はソ連。このように、様々な文例において何度も繰り返されることによって、ソ連とロシア語は中国にとって唯一無二の友邦や頼りになっているようにも読み取れるだろう。これはまさに当時の中国とソ連の連盟関係の教科書への投影として理解できれば、中国が一方的ソ連に愛想を振りまくと解釈するのも可能だろう。

俄文报（第 15 課の例 5）

我学习俄文，我有很多俄文书。（第 16 課の課文 2）

她是哪国人？她是苏联人。（第 19 課の課文 3）

他会中文，也懂俄文。（第 20 課の課文 1）

他懂俄文，他说俄文说說得很好。（第 21 課の課文 1）

你们学校有多少（个）苏联学生？ 有二十二个苏联学生。（第 22 課の課文 2）

他们唱不唱苏联歌儿？唱，他们唱苏联歌儿。他们会多少苏联歌儿！他们会很多。（第 23 課の課文 3）

什么电影？是苏联电影吗？不是，是中国的。（第 24 課の課文 1）

从苏联来的学生都在这个宿舍里住。（第 28 課の課文 3）

我同屋和一个苏联学生坐在我旁边。（第 33 課の課文 5）
大家都知道他要到苏联去。（第 39 課の例 6）
我的朋友到苏联去过。（第 40 課の例 4）
我有一个中国朋友叫张伟，他是俄文专业三年级的学生。……那个时候儿，我还不会中文，我们就用俄文談話。（第 48 課の課文 2）
他姐姐派到苏联去学习了。（第 66 課の例 3）
他就学过俄文，别的語言都不懂。（第 66 課の例 15）
誰俄文好，誰就给参观的人作翻译。（第 67 課の例 9）

極端的に考えると、『中国教科書』に見る中国とロシアまたは外国との関係はコミュニケーションのもとで出来たものというより、むしろ中国側が一方的に押しつけてできたように見える。そこで、他連盟国が完全に無視され、ソ連だけが一際目たった状況になった。

（2）1980 年代に入り、中国は建国 30 数年以来最も明るい国内・国際環境下にあり、日中友好関係も順調に発展しつつ中で、『简明汉语三十课』の編集発行があった。先人の成果を生かし、日本人学習者のことを念頭に置いて編集を行ったため、所々で中日コミュニケーションによる相互作用が見えている。例えば、

第三課「去中国」の会話本文では、木村は見送りに来た先生に両親を紹介し「这是张老师，这是我的爸爸，这是我妈妈」、お母さんは木村の語学留学に嬉しく思う気持ちを言葉にした「他去学中文，我们也很高兴。」

第十五課「谈天气」の本文で北京の四季の雑談が終わった後、補充会話練習のところで日本の花見のお話を導入してアウトプット練習を作った。

第二十課「交易会」の本文では、その頃日本人の間で関心が高くなっているシルクやコットン 100％の服装見本市を用意し、商社マン夫婦の社会＆文化見学にした。

他に、内容上、日本人の言い方が出ているから、適宜にアメリカ人やイギリス人の言い方をも紹介、上海の話しのついでに、廣州と日本の大阪や神戸をも提示。要するに、編集者の意図によって、教科書は適当に世界を視野に入れ、インプットとアウトプット交代でバランスよく異文化交流の橋架けとなっている。

上記の語句表現の対照を見た限り、もし『中国教科書』に見る中国の 50-60 年代の色彩を堅苦しい灰色に譬えれば、『简明汉语三十课』に映ったのは希望に導かれて柔軟性が増しているカラフルな中国像だと言いたい。

3. 編集者の表記に見る編集側の事情変化および集団・個人に関する意識の変化

教科書の内容は編著者の立場や視点などの事情によって変わりうるため、本節では、編著者の事情を教科書を影響する外部要素として検証してみることにする。

3.1.『中国語教科書』の編集者表記の変更事情について

1960 年初版の『中国語教科書』上下 2 巻本の表表紙には、編集者に「北京大学外国留学生中国語文専修班編」と記されているが、1969 年からの『合本　中国語教科書』においては「北京語言学院編」と記し変わった。

この変化は、北京語言学院の設立経緯と直接に関わっているものだ。フリー百科事典『ウィキペディア』で調べて見たところ、北京語言学院設立前、中華人民共和国建国直後の 1950 年に、後の学校設立に関わる教育者たちが清華大学で東欧交換生中国語文専修班を開設した。1952 年に外国留学生中国語文専修班として北京大学に編入され、1961 年に北京外国語学院（後の北京外国語大学）に編入された。1962 年に外国留学生高等予備学校として創立、1964 年に北京語言学院に名称変更された。1966 年、文化大革命により実質上停校となったが、1972 年再開された。

つまり、編集者チームはもとのままの顔ぶれで外国留学生中国語文専修班として北京大学に所属する期間中に「漢語教研室全員」[14]で『中国語教科書』を編集したが、『合本　中国語教科書』の頃はすでに北京語言学院所属になっていった。国の割り当てや調整に服従するという中国の慣例はこの事例でもおよその見当が付くだろう。

ここで、もう一点を注意されないのは、編集者チーム所属の起点となる東欧交換生中国語文専修班の開設背景である。「東欧」の概念は時代によって大きく変わるが、冷戦時代（第二次世界大戦後～旧ソ連崩壊（一説））においては旧ソ連型社会主義圏のヨーロッパ東部に位置する国々のことを指す。共に旧ソ連型社会主義圏というカテゴリに属すため、同圏内の言語交換生を互いに受け入れることを通して、相互の仲間意識を高めて連盟関係を固める狙いも間違いなく存在していただろう。そこで、中国語文専修班開設の当初、ともに旧ソ連型社会主義圏に属す東欧諸国からの交換生のみを對象として中国語教育を行う想定したのだ。但し、そこから僅かに 2 年後、北京大学への編入と共に、双方向性の交換を単方向性の留学へと方向が変更され、中国語文専修班の對象名目が東欧交換生から外国留学生に広がった。一方、中国語教育對象名目上の広がりとは対照的になり、『中国語教科書』の内容はこうした建て前とは別の事実を語っており、むしろ編集側の実際に持っていた政治意識と教育理念との乖離の現れでしょう。以上の 2 節を参照。

3.2.　『简明汉语三十课』の編集者表記に見る集団・個人に関する意識の変化ついて

専ら外国人学習者への中国語教育を担当する独立部署という位置付けになると、北京語言学院はその後にも幾つかの中国語教科書を編集したが、編集者表記の方針に徐々に変化現れる。

1960 年『中国語教科書』など：編集者チームが基本的に一つのかたまりに団結

---

[14] 同注 4。

して執筆分担者員名を明らかにしない

↓↓

（1976 年『漢語初歩』など：著者に北京語言学院と明記）[15]

↓↓

1982 年『中国語会話初級』など：表で依然として「北京語言学院」と表記しながら、「説明」部分（まえがきに相当する）に個々の執筆分担者名をまとめて提示する

↓↓

1983 年『简明汉语三十课』：表表紙で「北京語言学院副教授金德厚主编」のように、「肩書き＋個人名＋主編」という形式で表記しながら、まえがきに下記の通りに個々の執筆分担者名および分担箇所を明示する。

「本テキストの執筆者は次の通りである。（筆画順）

呂才桢　本文一部執筆

杨建昌　練習一部執筆

…　　…

金德厚　全体のまとめ」

権力連鎖において、常に権力の頂きに立つのは個人だが、改革開放の初期までは、中国社会の一般民衆の間では集団至上というイデオロギーが植え付けられていた。つまり、個人対集団の際に、個人は無条件に集団に従う、個人より集団のほうが権威を持つや絶対的優位に立つなどのことを意味する。それ故、教科書編集のような協同作業になってくると、最高責任者または総合責任者が実際に存在したとしても、個々の個人名よりも集団として表記するのも当時の主流からして全く問題が無いだろう。他方では、『简明汉语三十课』のように、慣例の集団ではなく、個人として最高責任者または総合責任者が責任を取る、分担の責任所在を明確にするという個人責任制への動向は、それまでの集団全体に重きを置く主流を突破し、改革開放の成り行きに順応するものとも言えよう。

4. おわりに

本稿はここまで、大きく異なる時期不同の二種の中国語教科書を検討して来た。

『中国語教科書』と『简明汉语三十课』の教科書本体ともその言語表現に含まれる文化的内容は濃厚な時代的色彩を帯び、タイミングが良く日本人学習者または研究者の中国語知識への飢えに応え、ロングセラーになっていた。前者はさらに中国建国後の同類教科書の中で開拓的な性質を持ち、特に現代中国語の基礎表記となる拼音と簡体字を果敢に採用し、その海外普及に大きく貢献していた。

それぞれ編集者側の情報検討は異なる視点から二種の教科書にみられる内容的または形

[15] 図書検索情報による。実物確認待ちのため、括弧付きとする。

式的特徴を確認できた。そこから逆に言うと、言語と文化が変容し続けるものなので、教科書も変わらないといけないだろう。

【検討対象とした中国語教科書（刊行順）】

北京大学外国留学生中国語文専修班・光生館編集部[編]1960『中国語教科書（日本語版漢語教科書縮刷版）上・下巻』、光生館、上巻：1962 年第 5 刷＋下巻：1961 年第 4 刷
北京語言学院・香坂順一[編]1969『合本　中国語教科書（日本語版漢語教科書縮刷版）』、光生館、1987 年第 17 刷
商務印書館[編]1973『基礎漢語』、株式会社満江紅
北京語言学院[編]香坂順一[改編]1982『中国語会話初級』、光生館 1993 年第 6 刷
金德厚[主編]1983『简明汉语三十课』、光生館、1990 年第 12 刷

【参考文献】

荒屋勤 1979「《汉语教科书》の語法重点と補足説明資料　―《基础汉语》《汉语初步》との比較―」、『大東文化大学紀要〈人文科学〉』第 17 号：pp. 135-154
植田晃次 2020「（研究ノート）朝鮮語テキストの日本語表記法の記述小攷－規範と言語事実のはざまの風景－」、『批判的社会言語学の探訪（言語文化共同研究プロジェクト 2019）』、大阪大学大学院言語文化研究科、pp. 43-54
植田晃次 2021「朝鮮語テキストの地図小攷　―理念と現実のはざまの風景―」、『批判的社会言語学の対話（言語文化共同研究プロジェクト 2020）』、大阪大学大学院言語文化研究科、pp. 63-74
小野秀樹(2018)『中国人のこころ　―「ことば」からみる思考と感覚―』、集英社
川上久寿 1980「ソ連の中国語教科書」、『大東文化大学紀要〈人文科学〉』第 18 号：pp. 187-202
澤田田津子 1999「日本語教科書の中の「日本」」、『日本語の地平線　―吉田彌寿夫先生古稀記念論集―』、くろしお出版：pp115-128
菅野敦志 2013「台湾の「拼音論争」とアイデンティティ問題　―国際化と主体性の狭間で―」、『アジア太平洋討究：（後藤乾一教授退職記念号 ： アジアのなかの日本 日本のなかのアジア）』第 20 号：p227-242
中山時子・戸村静子 2001『中国語発音字典』、東方書店
ヘレン・スペンサー＝オーティー[編著]、浅羽亮一[監修]、田中典子ほか[訳](2004)『異文化理解の語用論』、研究社
張西平[主編]2019《漢語作為第二語言教学史研究》、商務印書館

時況節の位置と談話解釈上の機能 - quand 節と comme 節の分析 -

高橋克欣

１．はじめに

筆者は高橋 (2021) において，時間的同時性をあらわす半過去が，主節との同時性をあらわす時況節である quand 節および comme 節の中で用いられる場合のはたらきの違いを説明するために，これらの時況節の談話解釈上の機能と半過去の解釈メカニズムについて論じた．本稿では，その中で今後の課題とした問題の中から，quand 節や comme 節が主節に対して前置される場合と後置される場合との談話解釈上の機能の違いについて考察を行う．

以下では，まず 2 節で談話解釈と時況節の機能について高橋 (2021) において考察が不十分であった点を確認する．それをふまえ，3 節で主節に対して前置された時況節の機能について，4 節で主節に対して後置された時況節の機能について考察し，5 節では quand 節と comme 節の文中の位置関係による機能の違いについて，談話解釈の観点から明示的に説明することを試みる．6 節では本稿のまとめを行い今後の課題に言及する．

２．談話解釈における時況節の機能

高橋 (2021 : 18) では，時間的同時性をあらわす半過去が，主節との同時性をあらわす時況節と考えられている quand 節および comme 節の中で用いられる場合の解釈の違いについて次のように述べた．

> quand 節において半過去を用いて場面設定（または場面特定）の機能を果たすためには談話内に何らかの利用可能な解釈資源が存在する必要があり，必然的に quand 節中での半過去の使用は限定的なものとなる．その一方で comme 節において半過去を用いる場合には主節の事態との関係によってひとつの文の中で半過去の解釈が成立するため，半過去の使用は特に問題とならない．

このこと自体は妥当であるとしても，この主張においては主節と時況節の位置関係が考慮されていない点に課題が残る．談話解釈の観点からは，同じ時況節であっても文中における位置によって担う機能が異なりうることに留意すべきである．

Riegel, Pellat et Rioul (2016 : 849) が説くように，主節に対して前置された時況節は主節によってあらわされる事態が位置づけられる枠組みを提供するのに対し，主節に対して後置された時況節は主題をあらわす[1]．また，福地 (1985) は英語の副詞節の位置による談話上の機能の違いについて論じている．

そこで，本稿では時況節が主節に対して前置される場合と後置される場合それぞれにお

[1] ここでは原文の propos に対して「主題」という訳語を充てている．

いて時況節が担う機能について，談話解釈の観点から考察を行う．

３．主節に対して前置された時況節の機能と談話解釈

福地 (1985 : 211) は「文頭にある副詞節は基本的に文全体の主題として旧情報を担い，主節が新情報を伝える」と述べているが，このことは基本的にフランス語の時況節についても当てはまることである．つまり，図と地の関係でいうならば時況節が地であるのに対して主節が図となり，主節の内容が伝えたいことの中心となる．

(1) *Quand Camille entra dans la salle de bains*, Franck et Myriam s'y trouvaient déjà.
(Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*)

(2) Vers neuf heures du matin, *comme je prenais une deuxième tasse de café*, on sonna.
(Amélie Nothomb, *Le fait du prince*)

quand 節や comme 節以外の時況節も，主節に対して前置されることが少なくない．

(3) *Pendant qu'on se mettait en rang*, le Bouillon est venu. (Sempé-Goscinny, *Le Petit Nicolas*)

(4) *Alors que la voiture quittait la ville et parcourait la campagne*, Alice regarda défiler les pâturages et se demanda si elle n'aurait pas préféré rester sur le plancher des vaches, quitte à ce que le voyage dure plus longtemps. (Marc Levy, *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*)

(5) *Tandis que je réfléchissais à tout cela*, le téléphone retentit (...).
(Eliette Abécassis, *Un heureux événement*)

(6) *Au moment où il commençait à m'expliquer sa vision de l'esthétique des cérémonies rituelles*, Flic fit son entrée dans le bureau, vêtu d'un impeccable blazer bleu marine (...).
(Michel Houellebecq, *La possibilité d'une île*)

(7) *Depuis que je connaissais ce numéro*, je l'avais souvent imaginée montant les marches d'un pas de plus en plus lent. (Patrick Modiano, *La Petite Bijou*)

それぞれの時況節は異なる統語的・意味的特性を持っているが，主節を解釈するために必要となる何らかの枠組みを提供するという談話解釈上の機能を考えれば，主節に対して時況節が前置されることが多いことは理に叶ったことである．主節に先行する時況節によって提供された枠組みに合わせて，後続する主節の談話的解釈が行われるのである．

筆者は高橋 (2016 : 67) において，quand 節の機能は「主節の事態が生起したのがいつであるかを示すために場面の特定を行うことにある」と主張したが（仮説③），主節に対する quand 節の位置関係が考慮されていない点において不十分な主張であるといえる．そこで，前置された quand 節の談話解釈上の機能を本稿では次のように再定義する．

前置された quand 節の談話解釈上の機能

主節によってあらわされる事態の時間的位置を特定するために，談話時空間内で場面の指定を行う[2].

このように再定義するのは次の理由による．高橋 (2016) では主節で単純過去や複合過去が用いられ，quand 節で半過去が用いられる場合の解釈条件を説明することに主眼が置かれているため，前述の仮説③は quand 節全般に当てはまるとはいいがたい.

実際のところ，quand 節があらわす「時間的同時性」は，かならずしも厳密な意味での「同時性」とはかぎらない．次の (8) のように，過去の完了時制（単純過去）arrivâmes と半過去 était が用いられる場合には 2 つの事態は同時に生起したと解釈されるが，これは quand が備える「時間的同時性」の意味にくわえ，半過去が備える同時性の意味効果によるものであるとみなすべきである．

(8) *Quand nous arrivâmes à San Remo* l'homme *était* là.　(Arsène Lupin, *Le Bouchon de cristal*)

一方で，たとえば次の (9) のように quand 節と主節の両方で完了時制 (trouva, appuya) が用いられる場合には，quand 節があらわす事態と主節があらわす事態は継起的な時間関係を持つものとして解釈される[3].

(9) *Quand il la (=la télécommande de sa télévision) trouva*, il appuya sur une touche.

(Marc Levy, *La prochaine fois*)

以上のことから，quand 節があらわすのは「緩い時間的同時性」であるといえる[4].

なお，quand 節の中で用いられる過去時制は単純過去や複合過去などの完了時制が多い

---

[2] 高橋 (2021) では「場面設定」および「場面特定」という表現を用いたが，本稿では「場面の指定」という表現に統一する．「場面の指定」については 5 節で論じる．

[3] 主節と quand 節の両方で完了時制が用いられた場合であっても時間的同時性をあらわすと解釈されることがあるが，これは quand 節が備える時間的同時性の意味効果が前面にあらわれた場合であると考えることができる．

[4]「継起性」を有するということは，主節と時況節であらわされる事態が時間的に連続して生起することになるため，結局のところ，当該の連続する 2 つの事態が「同時」に生起したと認識されることになる．

が，談話解釈上必要な要素がそろえば quand 節の中で半過去が用いられることもある[5].

(10) *Quand je traversais l'Amérique à pied, comme tout successeur de Kerouac qui se respecte*, j'ai essayé les drogues disponibles sur les routes et dans le désert, ce qui fait beaucoup.

(Amélie Nothomb, *Une forme de vie*)

次に，comme 節が前置された場合の機能について考察する．朝倉 (2005 : 418-419) では，時況節として用いられる comme 節の特徴として次のことがあげられている．

(I) <comme+時況節>は主節の前に置かれるのが普通だが，その後にも置かれ得る．
(II) <comme+時況節>の動詞は，例外を除けば半過去形に限られる．
(III) 時況節はいつも肯定.

(I) について，次の (11) と (12) は Imbs (1960) における引用例であるが，いずれも comme 節中の半過去は主節の単純過去や複合過去と同時に起こった事態をあらわす.

(11) *Comme le solidaire disait ces mots*, son corps s'effaça peu à peu.

(J. Green, cité par Imbs 1960 : 91)

(12) On l'a tuée ? demanda-t-elle, *comme Maigret s'asseyait près de la fenêtre*.

(Simenon, cité par Imbs 1960 : 91)

(III) について, 次の例のように comme 節の中で用いられる半過去の動詞が否定形の場合, comme 節は原因節として解釈されるが，主節との時間的同時性も成立している.

(13) *Comme je ne voulais pas rester à côté d'elle et entendre ça*, je suis parti.

(Hubert Mingarelli, *La dernière neige*)

また島岡 (1999 : 874) でも，comme 節と時間的同時性について「quand より強い．後には quand ではとれない半過去形がくることが多い. 多くは文頭にくるが, 後にくることもある.」と説明されている.

朝倉 (2005) や島岡 (1999) が述べる，comme 節が quand 節よりも強い時間的同時性を持つことと，例外を除けば時況節としての comme 節がもっぱら半過去形をともなうこととは互いに関連し合った特徴であると考えることができる.

---

[5] このことについては高橋 (2014, 2016) で具体的に論じているので，ここでは詳しく論じない.

これは，quand 節とは異なり，時況節としての comme 節は主節の事態と同時に生起した事態を積極的にあらわす機能を持っていることを意味する．そこで，前置された comme 節の談話解釈上の機能を本稿では次のように定義する．

前置された comme 節の談話解釈上の機能

主節によってあらわされる事態と時間的同時性を持つ事態をあらわすために，談話時空間において場面の焦点化を行う．

(14) *Comme la voiture entrait en ville*, Rivière se fit conduire au bureau de la Compagnie.

(Antoine de Saint-Exupéry, *Vol de nuit*)

４．主節に対して後置された時況節の機能と談話解釈

次に，主節に対して後置された時況節について考察する．福地 (1985 : 211) は「文末の副詞節は，談話上のはたらきが複雑である．（中略）文末の副詞節は旧情報を担うこともあれば新情報のこともある」と述べているが，このことも基本的にフランス語の時況節についても当てはまることである．これは，図と地の関係でいえば，常に時況節が地であり主節が図であるとはかぎらず，場合により時況節が地になることもあれば図になることもあるということになる．

主節に対して後置された quand 節について，旧情報を担う場合としては次のような例が該当する．

(15) J’étais seul *quand on a enterré mon père* et j’ai passé la nuit couché sur sa tombe.

(Patrick Modiano, *La ronde de nuit*)

(15) では，半過去で示される主節の事態が生起した場面を談話時空間内で指定するために，後置された quand 節が用いられている．

次の (16) では主節で複合過去が用いられ，後置された quand 節で半過去が用いられているが，ここでも後置された quand 節は，主節の事態が生起した場面を談話時空間内で指定する機能を果たしている．

(16) J’ai connu Francis Jansen *quand j’avais dix-neuf ans*, au printemps de 1964, (...).

(Patrick Modiano, *Chien de printemps*)

一方，後置された quand 節が新情報を担う場合としては，いわゆる「逆従属の quand 節」と呼ばれる次のような例が該当する．

(17) (...) et j'allais commencer à leur donner des claques, *quand le Bouillon a sonné la cloche de la rentrée* (...). (Sempé-Goscinny, *Le Petit Nicolas Le Ballon*)

(17) で後置された quand 節によってあらわされる事態は，主節の事態との時間的同時性を持つものの，談話構成上は主節の事態と同一の場面で生起する事態としては解釈されず，談話時空間内にあらたな場面が指定され，そこで事態が展開していくと解釈される．

これらのことをふまえると，後置された quand 節の談話解釈上の機能は次のように定義することができる．

後置された quand 節の談話解釈上の機能

(a) 主節によってあらわされる事態の時間的位置を明確にするために，談話時空間内で場面の指定を行う．

(b) 談話を展開するために談話時空間内のあらたな場面を指定し，そこに主節によってあらわされる事態とは切り離された事態を定位する．

後置された quand 節が旧情報を担う場合の機能が (a) に相当し，新情報を担う場合の機能が (b) に相当する．

一方，後置された comme 節の機能については十分な数の用例が収集できていないため示唆にとどまるものであるが，前掲の (12) から分かることとしては，あくまでも主節の事態が生起した場面の状況を補足的に説明するものにすぎず，後置された comme 節が積極的に場面を指定する機能を果たすとは考えにくいということである．

(12) On l'a tuée ? demanda-t-elle, *comme* Maigret *s'asseyait* près de la fenêtre.

後置された comme 節の談話解釈上の機能

談話時空間においてすでに設定済の場面に焦点を当て，主節によってあらわされる事態と時間的同時性を持つ事態を定位する．

もちろん，以下に示すように quand 節や comme 節以外の時況節が主節に対して後置されることもある．

(18) (...) il brisa leur accord tacite et lui adressa la parole *pendant qu'elle s'amusait avec des pastels* (...). (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*)

(19) L'aspect du ciel a changé *tandis que j'attendais assis au bord de la route nationale*. (Hubert Mingarelli, *La dernière neige*)

５．談話解釈における quand 節と comme 節の機能

最後に，quand 節による場面の指定と comme 節による場面の焦点化の違いを考察する．

quand 節は，主節に対して前置される場合も後置される場合も，談話の進行にしたがい談話時空間内に複数導入されると考えられる一連の場面群の中から特定の場面を選択し，提示する機能を担っていると考えられる．このことを本稿では「場面の指定」と呼ぶ．

それに対し，comme 節を用いる際には談話時空間内の潜在的な場面群の存在が認識される必要はなく，主節および comme 節であらわされる 2 つの事態が同時におさめられる場面に焦点を当てることがその機能であると考えられる．

両者の違いを図示すると，次のようになる．

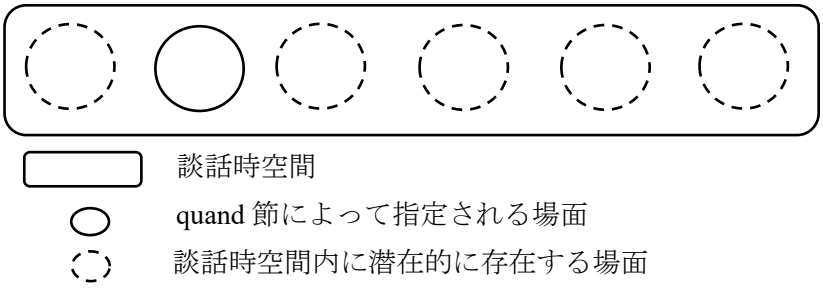

図 1　談話解釈における quand 節の機能[6]

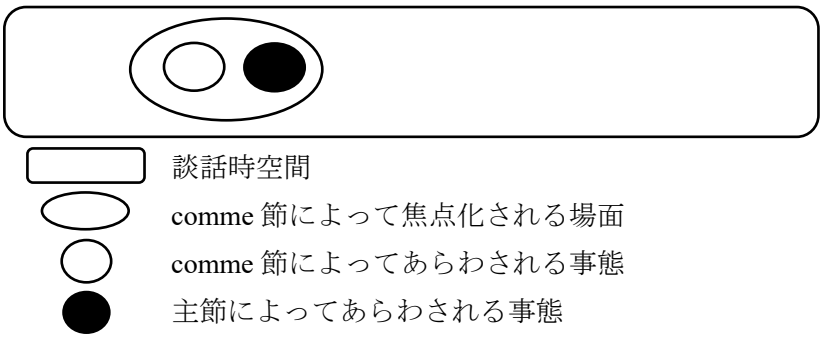

図 2　談話解釈における comme 節の機能[7]

６．まとめと今後の課題

本稿では，主節との時間的同時性をあらわす時況節である quand 節および comme 節が，主節に対して前置される場合と後置される場合の機能の違いについて，談話解釈の観点か

---

[6] この図式の中に主節によってあらわされる事態と quand 節によってあらわされる事態が描かれていないのは，4 節で論じたように，後置された quand 節の場合には主節の事態と quand 節の事態との関係が 2 通りあると考えられるからである．

[7] 「場面」の概念を時間的なものに限定しなければ，comme 節が原因節として解釈される場合にもこの図式を適用することができる．comme 節を用いる際には，時間関係であれ因果関係であれ，2 つの事態が同じ認識的枠組みの中で解釈される必要があるのである．

ら考察した.

quand 節と comme 節は主節との時間的同時性をあらわすという共通点を持つものの，談話上の機能が異なっている．前置された quand 節は主節によってあらわされる事態の時間的位置を特定するために談話時空間内で場面の指定を行うのに対し，後置された quand 節は談話時空間内で場面の指定を行う機能は共通しているが談話解釈上の機能が異なる．一方，前置された comme 節は時間的同時性を持つ 2 つの事態が定位される共通の場面を設定し焦点化するのに対し，後置された comme 節は主節によってあらわされる事態と時間的同時性を持つ事態を定位するために談話時空間においてすでに設定済の場面を焦点化する.

本稿では高橋 (2021) に続き quand 節および comme 節を考察対象としたが，その他の時況節についても多くの用例の観察および分析を行い，各時況節の位置と談話解釈上の機能との関係を明らかにしたうえで各時況節の機能の特徴を見きわめる必要がある.

また，次のように同一文中で複数の時況節が用いられることもあるが，このような場合の時況節同士の関係について詳しく考察した先行研究は管見の限りほとんど見られない.

(20) *Quand il entra dans le bistro avec d'infinies précautions et une moue d'huissier*, *alors que nous peignions de rouge et de vert de très fons bouchons de balsa sculptés tout exprès pour l'ablette*, je compris que c'en était fini pour moi d'un grand pan de douceur.

(Philippe Claudel, *Le Café de l'Excelsior*)

今後はこれらの問題について多数の用例を詳細に分析したうえで考察を重ね，人間の時間認識とその言語化のありかたについてさらに理解を深めることを目指したい.

参考文献

Paul Imbs. (1960) *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.

Martin Riegel, Jean-Christophe Pellat et René Rioul. (2016) *Grammaire méthodique du français*, 6e édition, Presses Universitaires de France.

朝倉季雄（木下光一・校閲）(2005)『フランス文法集成』白水社.

島岡茂 (1999)『フランス語統辞論』大学書林.

高橋克欣 (2014)「時を表す副詞節における半過去と談話的時制解釈」春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線』2:pp.331-368.ひつじ書房.

高橋克欣 (2016)『「こと」の認識「とき」の表現-フランス語の quand 節と半過去』京都大学学術出版会.

高橋克欣 (2021)「談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム - 談話的時制解釈の観点からの分析 - 」『時空と認知の言語学Ｘ』言語文化共同研究プロジェクト 2020 : pp.11-19.

福地肇 (1985)『談話の構造』大修館書店.

指示詞の体系を構成する二つの意味基準について

瀧田恵巳

1.　問題提起：本論文のきっかけと佐久間(1983)によるこそあどの分類

2021 年春の授業で、日本語と中国語の指示詞について次の相違点が明らかになった。
金水・木村・田窪(1989:27)や金井(2005)も指摘しているように、日本語では例(1)のように方角を表す「こちら」や「こっち」を用いて話し手を指すことがある。一方中国語では「こっち」に相当する「这边」で話し手を指すことはできないとのことであった[1]。

1)「そっち（＝きみ）にはずいぶん迷惑をかけたね」
「いや、こっち（＝わたし）こそ」　　（金水・木村・田窪 1989:27）

中国語の指示詞は「这」と「那」という近と遠の二系列で日本語のコソアの三系列とは異なるが、この日本語と中国語の相違は明らかに遠近によるものではない。例(1)に関する日本語と中国語の指示詞の用法の相違はどのように位置づけることができるだろうか。
佐久間(1983:7)はこそあどの語彙を次のように分類している。

	もの	方角	場所	もの・人（卑称）	性状	指定	容子
近称	コレ	コチラ、コッチ	ココ	コイツ	コンナ	コノ	コー
中称	ソレ	ソチラ、ソッチ	ソコ	ソイツ	ソンナ	ソノ	ソー
遠称	アレ	アチラ、アッチ	アソコ	アイツ	アンナ	アノ	アー
不定称	ドレ	ドチラ、ドッチ	ドコ	ドイツ	ドンナ	ドノ	ドー

表 1　佐久間(1983)によるこそあどの分類（同書、p.7 の表に基づき作成）

表 1 のマトリックス（行列）による分類は二つの意味基準によって成立している。
縦軸の基準は「指示」関係に由来する。佐久間(1983:6)によると、この基準は「自己を中心として「もの」または「こと」がどういう位置をとり、どの方向にあり、どういう有様を呈しているか」を示し、その下位分類（近称、中称、遠称、不定称）は話し相手との関係における人代名詞の称格（自称、対称、他称、不定称）に対応している[2]。
横軸の基準は指し示される対象の大まかな属性を表す。その下位範疇は指し示される対象

[1] この指摘は大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻博士前期課程の徐悦文氏によるものである。
[2] 古田(1980/1992:15)によると、「近称、中称、遠称、不定称」の名称による分類は大槻文彦の『語法指南』(1889)に見られる。また古田(1980/1992:17-24）は、アストン(W. G. Aston) の A Grammar of the Japanese Written Language 第二版（1877)が既にコソアを人称に関連付づけていると指摘している。

が事物であるか状態であるかによって区別され、「もの」、「人（卑称）」にとどまらず、「性状」「指定」「容子」なども含まれる。これらは品詞の点で名詞の範疇には収まらないため、佐久間(1983:7-13)は、こそあどの名称として当時一般的であった「代名詞」という名称を不適切とし、「こそあど」、「指す語」、「指示詞」と呼ぶ。

表 1 に当てはめると、例(1)に見られる日本語と中国語の相違は縦軸の指示機能ではなく、横軸の対象の属性に関わることがわかる。つまり日本語では場合により方角を表す語彙で人称を指すことが出来るが、中国語ではそれができないのである。

このように二つの意味基準は他言語の指示詞にも適用することができ、また実際に指示詞を二つの基準によって体系化する研究も見られる。

さてこの二つの基準に該当するものとして、既に「関係概念」と「範疇概念」が存在する。これらは井出(1958)によって提唱されたもので、岡村(1972)は関係概念を話し手が表現しようとするものごと（「素材」）と話し手が意識している「自分」との関係のしかたであり、範疇概念は「素材」を範疇化してとらえた大まかな質の差であるとする。正保(1981:61)も井出(1958)、岡村(1972)の見解を踏襲し、この二つの概念を指示詞の本質と捉え、二つの概念が分かちがたく融合して指示詞の意義を構成しているとし、佐久間のこそあどの体系は話し手との関係概念と指示対象の範疇概念を併せて表示したものであるとする[3]。

このように二つの意味基準は他言語の指示詞にも適用可能であるとともに、指示詞の体系を構成する概念であると考えられる。しかしこの二つの基準はなぜ言語を超えた普遍性を有するのか。またこれらが指示詞の体系を構成する要因はどこにあるのだろうか。

以上の問題を明らかにするために、本論文では、まず 2 で中国語とドイツ語の指示詞及びダイクシスを二つの基準によって体系づける研究を紹介し、二つの基準の共通性を検証する。3 では二つの基準の名称を統合し、指示詞の意味的特徴を普通名詞及び固有名詞と比較して考察することにより、その体系を構成する根拠を明らかにしたうえで二つの基準を定義する。4 ではまとめと今後の課題を提示する。

2. 二つの基準による分類に関する具体例の検証

2.1. 木村(1992)による中国語指示詞の分類

木村(1992:183)は、日本語のコソアとの対照に基づいて、中国語の指示詞「这」と「那」の現場指示に関わる語彙を佐久間(1983)に類似する二つの基準により表示する。

表 2 の縦軸の「近」と「遠」を統合する「指示領域」は、「指示」機能に由来する基準に当てはまる。一方横軸の「無範疇」や「事物」等を統合する「範疇概念」は、指し示される対象の共通属性に由来する基準に該当する。

木村(1992)においては、類似する二つの基準（「指示領域」と「範疇概念」）によって、中国語の「这」と「那」が日本語のコソアと並置して分類できることが示されている。

[3] 正保(1981)は 1966 年版のこそあどの体系を引用しているが、これは本論文の表 1 に該当する。

範疇概念 指示領域	無範疇[4]	事物	場所	方向	時間	様態・程度
近	这	这个	这里 这儿	这边	这会儿	这样　这么
遠	那	那个	那里 那儿	那边	那会儿	那样　那么
	こそあ（れ／の）	こそあ れ	こそあそ こ	こそあ っち	こそあ のとき	こそあ んな（だ／に）； こそあ —

表 2　木村(1992)による中国語の指示詞「这」と「那」の分類
（同書、p.183 の表に基づき作成）

2.2.　Sennholz(1985)によるダイクシスの分類

ドイツ語圏の代表的なダイクシス研究 Sennholz(1985)は、表３のように二つの基準（「関係タイプ Relationstyp」と「次元 Dimension」）によってダイクシスを六つに分類する。

次元 関係タイプ	空間ダイクシス	時間ダイクシス	人称ダイクシス
自己ダイクシス	空間自己ダイクシス hier「ここ」	時間自己ダイクシス jetzt「今」	人称自己ダイクシス ich「私」
非自己ダイクシス	空間非自己ダイクシス da「そこ」	時間非自己ダイクシス morgen「明日」、früher「以前」	人称非自己ダイクシス du「君」

表 3　Sennholz(1985)によるダイクシスの分類
（同書、p.43 の表に基づき作成。日本語訳と事例の付与は本論文著者による）

縦軸の「関係タイプ」は「自己ダイクシス Autodeixis」と「非自己ダイクシス Heterodeixis」から成る。「自己ダイクシス」はいわば一致する関係であり、ダイクシス関係の出発点である「原点(Origo)」と目標であるダイクシス対象が一致する(Sennholz 1985:46-47)。「原点」とは Bühler(1934/1982:102)によって提唱された術語で、その名称は指示場を座標に見立てると指示の起点が座標の原点となることに由来する。また原点の代わりに置かれるべき

[4] 木村(1982:205)は「無範疇」を「「这／那」が「这个／那个」以下の他の指示形式とは異なって、それ自身何ら範疇概念も担うものではないことを意味するもの」と注釈しており、いわば範疇概念としてはゼロであると見なしている。

指示詞として hier「ここ」、jetzt「今」、ich「私」が挙げられる。原点を巡っては諸説あるが、Sennholz(1985)によると、これら三つの指示詞は原点を表すと同時に言葉によって指し示されるダイクシス対象とも一致することから自己ダイクシスと見なされる。これに対して「非自己ダイクシス」には、原点とダイクシス対象が一致しない表現、例えば da「そこ」のように話し手の領域以外の場所、morgen「明日」や früher「以前」のように発話時以外の時、du「君」のように話し手以外の人物を表す表現が挙げられる。
横軸の「次元」には三つの下位範疇「空間ダイクシス Lokaldeixis」、「時間ダイクシス Temporaldeixis」、「人称ダイクシス Personaldeixis」がある。「次元」が三つである点に関して Sennholz(1983:43)は、多くの先行研究でも三分類であることを示すことで、その実用性を主張する。また Sennholz(1985:148)に「次元」という名称に関する記述があり、それによると、空間ダイクシスが「三次元性 Dreidimensionalität」、時間ダイクシスが「一次元性 Eindimensionalität」という物理的な属性を持つのに対し、人称ダイクシスは物理的な属性の無い「ゼロ次元性 Nulldimensionalität」、もしくは物理的な次元を否定する「非次元性 Adimensionalität」を有するものとする[5]。
表 3 の縦軸の「関係タイプ」は「ここ、今、私」に代用される原点と指し示される対象との関係に基づくという点で表 1 の「関係概念」と表 2 の「指示領域」という縦軸の意味基準に該当する。表 3 の横軸の「次元」は指し示される対象の属性に関わる意味基準であることから、表 1 及び表 2 の横軸の意味基準である「範疇概念」に該当する。

2.3. Diewald(1991)による指示詞の分類

同じくドイツ語圏のダイクシス研究 Diewald(1991)は、二つの基準を Sennholz(1985)とは別の理論的枠組みで捉える[6]。Diewald(1991:1)によると、ダイクシスは「言語による指し示し sprachliches Zeigen」であり、指示機能を持つことばが必須である点で指し示す動作とは異なる。Diewald(1991:19-20)は、指示対象が原点に対してどこに存在し、それが何であるかを述べることによってのみダイクシスは成立するとし、指示的構成要素と命名的構成要素の双方から成る「ダイクシス過程 deiktischer Prozeß」を導入する。
ダイクシス過程の指示的構成要素とはコンテクストに結合した方向関係であり、ダイクシスの起点である原点へ戻る「再帰的関与 reflexiver Bezug」とダイクシスの目標であるダイクシス対象へ向かう「指示的関与 demonstrativer Bezug」の二つの局面に分けられる。一方、ダイクシス過程の命名的構成要素は二つの意味論的軸「距離 Entfernung」と「次元 Dimension」から成る。「距離」とは原点とダイクシス対象間の隔たりであり、指示的構成要素の傾向が強く、原点を含むか否かによって「原点含有段階 origoinklusive Stufe」と「原点非含有段階 origoexklusive Stufe」に分けられる(Diewald 1991:20, 33-34)。「次元」とはダイクシス対象の種類であり、Diewald(1991:20,30-33)では、「空間次元 lokale

[5] Sennholz(1985)のダイクシス理論及び「次元」に関しては、渡辺（2009:170-173）も参照されたい。
[6] Diewald(1991) のダイクシス理論については瀧田(2005)も参照されたい。

Dimension」、「時間次元 temporale Dimension」、「人称次元 personale Dimension」、「もの次元 objektale Dimension」、「モダール次元 modale Dimension」という五つの下位範疇に分類される。従来の三つの次元（「空間」、「時間」、「人称」）に「もの」と「モダール」を加える理由として、Diewald(1991:143-144)はその先験性を取り上げる。「空間」と「時間」はアプリオリに存在し、「人称」もまた各コミュニケーション状況から先験的に与えられる存在である。「もの」もまた言葉にする以前に存在するか、もしくは想像されており、且つコミュニケーションの対話者とは区別される。ある事態が事実であるか否かという「モダール」も言葉以前の現象である。Diewald(1991:144)によると、これら五つの次元は本質的かつ恒常的な外界現象であり、必然的に言語化される。

以上のダイクシス過程の構成要素に従うならば、例えば話し手が自分のいる場所を指して「ここに私はいる Hier bin ich」と言う場合の「ここ hier」は、コンテクストに結合した方向関係として、原点への関与（ダイクシス対象を確定するにはまず原点である話し手の位置を探査する必要がある）**[再帰的関与]**、及びダイクシス対象（「ここ」という場所）への関与**[指示的関与]**を有し、また場所という空間**[次元]**で、原点を含む段階**[距離]**を示す。Diewald(1991)にはその試みはないが、命名的構成要素に従って指示詞及びダイクシス表現は表 4 のように分類することができる。なお Diewald(1991:231f.)によると、「モダール次元」の原点含有段階は事実の記述で無標であるため、表現としては乏しく、事実として述べる話者の態度を表す動詞の法「直説法」が当てはまる。一方、原点非含有段階は事実ではないものとしての記述であるため、蓋然性を表す語彙を挙げられる。

次元 距離	空間次元	時間次元	人称次元	もの次元	モダール次元
原点含有段階	hier 「(原点を含有する場所としての）ここ」	jetzt「今」	ich「私」	dieser「これ」	[事実的] 直説法
原点非含有段階	dort「あそこ」	einst「かつて、いつか」	du「君」	jener「あれ」	[非事実的] wahrscheinlich「おそらく」

表 4　Diewad(1991)の命名的構成要素に基づくダイクシス表現の分類
（同書の記述に基づき作成。日本語訳は本論文著者による）

表 4 の縦軸の「距離」は指示的構成要素に関連する指示機能の由来する基準であるという点で、表 1 の「関係概念」、表 2 の「指示領域」、表 3 の「関係タイプ」と共通しており、横軸の「次元」は空間や時間等の対象の共通属性に関する基準であることから表 1 と表 2 の「範疇概念」及び表 3 の「次元」に該当すると見なされる。

3. 考察：二つの基準の名称と意味論上の位置づけ及び定義

2 で検討した結果、木村(1992)、Sennholz(1985)、Diewald(1991)による基準は表 5 のように佐久間(1983:7)のこそあどの体系を構成する二つの基準に対応させることができる。

佐久間(1983:7)	木村(1992)	Sennholz(1985)	Diewald(1991)
指示関係の基準 （「関係概念」）	「指示領域」	「関係タイプ」	「距離」
指示対象の属性の基準 （「範疇概念」）	「範疇概念」	「次元」	「次元」

表 5　二つの基準の対応関係

本論文では二つの基準の共通特性を認め、これらを統一する名称として「距離」と「次元」が最適であると考える。その理由は次のとおりである。

第一に「距離」と「次元」は卓越して簡潔な名称である。

第二に、「距離」と「次元」は指示詞の体系を構成する意味素性であり、命名的構成要素としてこれらの名称を与えた Diewald(1991)の見解を踏襲することに意義が認められる。

第三に「距離」と「次元」という名称の柔軟性と包括性が挙げられる。

「距離」という名称は、話し手及び聞き手からの隔たりに通じ、佐久間(1983)の「近称、中称、遠称、不定称」及び木村(1992)の「近、遠」という段階的な下位分類を統合するうえで柔軟に対応することにできる名称である。一方、「関係概念」や木村(1992)の「指示領域」及び Sennholz(1985)の「関係タイプ」という名称はその段階的な要素に欠けている。

「次元」という名称もまた柔軟性と包括性を併せ持つ。Sennholz(1985)においては「空間」の物理的三次元性、「時間」の物理的一次元性、「人称」の「ゼロ次元性」及び「非次元性」に由来するが、より広義に指示対象の属性と捉えれば必ずしも三つに限定する必要はない。Diewald(1991)は五つの次元を挙げているが、久慈・斎藤(1982)においても、日本人幼児のこそあどの獲得順序を調査・表示する際、指示対象の属性を「場所次元」「もの次元」「指定次元」「方角次元」という「次元」を取り入れた名称を用いて区別している。

さて 2 では距離と次元の共通点を指摘してきたが、そもそもこの言語を超えた普遍性は何に起因するのだろうか。

距離と次元は Diewald(1991)いう指示詞の命名的構成要素であり、井出(1958)、岡村(1972)、正保(1981)のいう指示詞の本質であるが、その真偽は指示詞以外の範疇と比較することによって判明する。瀧田(1999, 2001)は日本語の指示詞の意味特徴を普通名詞及び固有名詞と比較するが、その前提として、言葉の意味を言語の構造と機能の観点から、バンヴェニスト(1983)[7]の構造言語学の見解に基づく「構造的意味」と鈴木(1973)[8]及び時枝(1941)[9]の

[7] バンヴェニスト(1983:99-107)は、言語を体系と見なすのはその構造の分析を問題にするからであるとする。また「おのおのの体系は相互に条件付け合う単位の内的配列、すなわちこれらの単位の構造を組み

見解に基づく「機能的意味」に大別する。

「構造的意味」とは、言語体系の構造を分析する二つの操作（「線分分割 segmentation」と「代入 substitution」）[10]によって導き出される意味であり、ある上位概念に基づく一面的な意味記述であるとともに、その上位概念の範疇に属する構成員同士の示唆的特徴である（瀧田 1999:331-334,337-341）。例えば「私はそばをすすった」という文において、「そば」の代わりに代入可能な普通名詞を「麺類」という上位概念の範疇にあるものとし、その範疇内の他の構成員（「うどん」「そうめん」など）と比較すれば、「そば」という語について、例えば「そば粉を水でこねて薄くのばし、細く切った食品」（『明鏡国語辞典』）といった一つの共通特性（「麺類」）に基づく示唆的特徴を記述することが出来る。このように「構造的意味」にはある上位概念に基づく客観性が担保され、それにより他言語との比較を容易にするが[11]、その一方で別の範疇への拡張は排除される。

「機能的意味」は、言語活動を行う主体の認識に主眼をおいたもので、「その言語形式を通じて得られる知識や経験から成る言葉の内容」（瀧田 1999:337）である。先ほどの「そば」を例にするならば、そばが嫌いな人とそば通の間では、「そば」という言語形式から得られた知識や経験は大いに異なる。このように「機能的意味」は個人差を前提としている。

瀧田(1999:341-342)によると、普通名詞は先の「そば」の例に見られるように、構造的意味と機能的意味の両方を持つ。それに対して固有名詞は、本質的にある特定の対象にしか

立てている配列関係によって、他の体系とは異なっている」(同書、p.103)という見解を示し、言語の構造を分析することにより言語を相互に比較・対照することが可能になることも示唆している。

[8] 鈴木(1983:90-93)は、一つの言語社会に属するすべての人々の間でほぼ共有されているであろう基礎的な語彙がどのようにして学習されたかという観点から、一般的なことばの意味を「ある音声形態（具体的に言うならば、『犬』ということばの『イヌ』という音）との関連で持っている体験および知識の総体」（同書、p.92）と規定し、このように規定されることばの「意味」には、二つの性質【①ことばの意味は個人個人によって非常に違っている。②ことばの「意味」はことばによって伝達することはできない】が含まれるものとする。本論文の「機能的意味」はこの鈴木の規定に依拠し、特に①の性質に着目している。

[9] ことばの形式と内容は分かちがたく結びついており、一方なくしては言葉として成立しない。しかし両者の間には必然的な結びつきがないことはソシュールが言語の恣意性において提唱するとおりである。では、ことばの形式と内容を結びつけているものは何か。これに関して時枝(1941/2007:26-28)は、言語は主体的活動に基づくものとし、主体の認識を通じて音声や文字に意味が結びつくという見解を示している。

[10] 言語を各部分が関連して全体を構成する構造と見なすことは、同時にある単位をさらに諸要素に分割し、互いに関連付ける研究方法に結びつく。本論文ではバンヴェニスト(1983:129)に依拠し、構造分析は、全体を構成する諸要素に分割する「線分分割」と、その構成要素と同じ範疇に蔵すると見なされる他の記号に置き換える「代入」という二つの操作から成り立つものとする。

[11]線分分割により構成要素を割り出し、要素間の関係を記述することは、他言語との比較・対照を容易にする。例えば、日本語で「私はワインを飲みます」というところを、ドイツ語では Ich trinke Wein という。文成分に分割すると、日本語は〈主語＋目的語＋動詞〉の順だが、ドイツ語は〈主語＋動詞＋目的語〉の順であり、文成分の順序が異なることがわかる。さらに日本語は主語や目的語に原則として助詞が付くのに対して、ドイツ語の場合、名詞そのものが格変化して文内での役割を示す。このように線分分割が単位の内部構造を明らかにする一方、代入は構成要素そのものの特性を明らかにする。鈴木(1973:10-13)は、日本語の「のむ」の用法を英語の drink の構造と比較する観点から、「のむ」と呼ばれる動作の対象を次々に代入し、この動作は液体(「お茶をのむ」)・固体(「錠剤をのむ」)・気体（「タバコをのむ」）のいずれも対象としてとりうることを見いだす。さらに「ご飯を食べる」という文の「食べる」という部分に「のむ」を代入し、「食べる」と比較する。すると「食べる」も「のむ」も同じく口にものを入れ、体内に摂取する行為を表すが、「のむ」という行為は咀嚼を伴わないことがわかる。以上の代入操作により、鈴木(1983:13)は、「のむ」を「何ものかを、口を通して、かまずに、体内に摂取すること」と規定する。

適用されないため、上位概念において他の構成員を区別するという構造的意味は不要である一方、各固有名詞にはそれを通じて得られた様々な個別の知識や経験、つまり機能的意味が蓄積される（瀧田 1999:342-345）。
指示詞には、普通名詞と同様、構造的意味と機能的意味があるが、その特筆すべき点は、「対象と主体との関係において示す」(瀧田 2001:416) という構造的意味を持つ点にある。例えば砂糖と書かれたラベルの付いた瓶を指さして「これを明日持ってきてください」と言われた場合、「これ」は厳密にいえば話し手の指さす先にある「もの」すべてを指し示すことができる。つまり、例えば「瓶」「ラベル」「砂糖」「瓶のふた」「ガラス」等の様々な属性を持つものが考えられるのである。この「対象と主体との関係」という言語活動に関わる意味は本論文の「距離」に該当するが、これは同時にその遠近によって各指示詞を互いに区別する構造的意味でもある。そして指示詞はこの言語活動に由来する構造的意味を持つという点で普通名詞及び固有名詞と明確に区別される。また瀧田(2001)では指摘されていないが、上記の「これ」によって表現される対象の属性はせいぜい「もの」でしかなく、普通名詞に比してはるかに少ない。この「次元」という対象の僅少な属性もまた指示詞を普通名詞から区別し、個々の指示詞を互いに区別する構造的意味である。
指示詞の機能的意味に関しては、その習得過程や使い方の個人差が挙げられる。迫田(1998:108-110)は、小学 3 年生の日本人児童による第一言語の習得過程に関して、会話の中で現場の事物を指示する現場指示用法については 91.5%という高い正答率を示し日本人成人との間に有意な差が見られなかったのに対し、言語テクストにおける先行詞を照応的に示す「単純照応用法」の正答率は 69.6%で成人との間に有意な差がみられることを報告している。指示詞の使用上の個人差に関しては、服部(1968/1992)が指摘する出身地による対立型と融合型の認識の相違などが挙げられる。
以上のことから、距離と次元は指示詞の体系を構成するとともに、指示詞を普通名詞と固有名詞から区別する構造的意味であることが分かる。つまり距離と次元は、普通名詞及び固有名詞に対して指示詞が存在する如何なる言語にも通用する指示詞の本質なのである。
それでは 2 の分類例と 3 の考察により、距離と次元を定義しよう。
距離のポイントは、ダイクシスの起点と目標との関係にある。その起点として最適な概念は、指示詞によって表現される指示場の中心として発話の時点、場所、発話者等を包括的に示す原点(Origo)である。ダイクシスの目標に関しては、厳密にいえば、指示詞によって指示されるダイクシス対象と意図された指示対象の区別がある。例えば地図上の一か所を指し示しながら「私たちは今ここにいる」という場合、指示詞「ここ」が指し示すダイクシス対象は地図上の位置であり、意図された指示対象は話し手のいる現在地である。従って指示詞の意味を扱う点ではダイクシス対象という名称の方が適切である。この名称に従うと、次元とはダイクシス対象の僅少な属性となる。さらに構造的意味という要素を加えると、距離と次元は次のように定義される。

「距離」: 原点(Origo)とダイクシス対象との関係を上位概念とし、その範疇に属する指示詞の意味内容を互いに弁別する示唆的特徴

「次元」: ダイクシス対象の僅少な属性を上位概念とし、その範疇に属する指示詞の意味内容を互いに弁別する示唆的特徴

4. まとめと今後の課題

本論文では、日本語と中国語の指示詞の相違を出発点に、佐久間(1983)の指示詞の体系における二つの基準に着眼し、木村(1992)、Sennholz(1985)、Diewald(1991)による体系の基準と比較してその共通性を検証し、「距離」と「次元」という名称で統合した。さらに普通名詞と固有名詞に照らし合わせることにより、距離と次元が指示詞の構造的意味であるとともに言語を超えた普遍性の根拠になりうることを示し、その定義づけを行った。

従って距離と次元はダイクシス表現のさらなる比較・対照を可能にする。

距離の基準からいえば、日本語のこそあどのうち指定の意味を持つコソアは、確かに中国語とドイツ語の二系列に対して三系列であるが、三上(1970)が指摘するように、コソアはコとソの対立とコとアの対立とも見なされる。また Sennholz(1985)及び Diewald(1991)の人称における「私 ich」と「君 du」の対立はコとソの対立に合致するが、Diewald(1991)の表 4 の「もの次元」に挙げられている「これ dieser」と「あれ jener」の対立はコとアの対立に合致する。つまり日本語のコソアの三系列は均等ではなく、ドイツ語のダイクシス体系における距離の二系列も決して一枚岩とはいえない。

次元に関していえば、日本語のこそあどは Sennholz(1985)及び Diewald(1991)によるドイツ語のダイクシス表現の体系と比較すると、「空間」や「もの」は満たすが、「時間」や「人称」の次元に欠けている。しかしその用法を詳細に考えるならば、「これから」や「これまで」という時間的表現において「これ」は「今」に相当する時間的意味を表す。「こちら」や「そちら」は本来方角を表すが、例(1)で示したように、場合により「こちら」で話し手を、「そちら」で聞き手を表すこともできる。仮にこそあどを空間次元の範疇に属するとするならば、こうした事例は空間から時間及び人称への次元を超えた転義ともいえる。

このような距離における矛盾や次元を超えた転義に関連する指摘はすでに見受けられるが、しばしば距離と次元の区別が看過されている。しかし距離と次元は、指示詞の体系を支える要であると同時に、言語を超えた比較・対照にも耐える基準である。今後は指示詞の諸問題を距離と次元に基づいて明確化したうえで議論することを課題としたい。

参考文献

井出至 **(1958)**:「代名詞」『続日本文法講座 I　文法各論編』 pp. 111-133. 明治書院

岡村和江 **(1972)**:「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座 2』 pp. 79-121. 明治書院

金井勇人 **(2005)**:「〈話し手〉を指す「こちら」の 2 用法」『国語学研究と資料』28, pp. 37-47. 国語学研究と資料の会

木村英樹 **(1992)** :「中国語指示詞の「遠近」対立についてー「コソア」との対照を兼ねて」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』 pp. 181-211. くろしお出版

金水敏・**木村**英樹・**田窪**行則 **(1989)** :『日本語文法　セルフマスターシリーズ 4　指示詞』くろしお出版

久慈洋子・**斎藤**こずゑ **(1982)** :「子どもは世界をいかに構造化するか—deictic words の獲得ー」秋山高二・山口常夫・F・C・パン（編）『言語の社会性と習得』 pp. 221-244. 文化評論出版

佐久間鼎 **(1983)** :『現代日本語の表現と語法（増補版）』くろしお出版

迫田久美子 **(1998)** :『中間言語研究ー日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得ー』渓水社

正保勇 **(1981)**:「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』 pp. 51-122. 国立国語研究所

鈴木孝夫 **(1973)** :『ことばと文化』岩波書店

瀧田恵巳 **(1999)** :「言語における指示詞の意味について（上）」『言語文化研究』第 25 号 pp. 331-346. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳 **(2001)** :「言語における指示詞の意味について（下）」『言語文化研究』第 27 号 pp. 415-433. 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科

瀧田恵巳 **(2005)** :「ダイクシス体系におけるドイツ語指示詞の位置づけと分類についてーDiewald(1991)による her と hin 及びその二重不変化詞の分類を例に—」『言語文化共同研究プロジェクト 2004：言語における時空を巡ってⅢ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科

時枝誠記 **(1941/2007)** :『国語学原論（上）』岩波書店 2007 （底本：『国語学原論』 岩波書店 1941）

服部四郎**(1968/1992)** :「コレ、ソレ，アレと this, that」金水敏・田窪行則（編）『指示詞』 pp. 47-53. ひつじ書房 1992（底本：『英語基礎語彙の研究』 pp. 71–80. 三省堂 1968）

バンヴェニスト，E. **(1983)**（岸本通夫監訳）:『一般言語学の諸問題』みすず書房

古田東朔**(1980/1992)** :「コソアド研究の流れ（一）」金水敏・田窪行則（編）『指示詞』 pp. 7-31. ひつじ書房 1992 （底本：『人文科学科紀要』71, pp. 119-156. 東京大学教養学部人文科学科 1980）

三上章**(1970)** :「コソアド抄」『文法詳論集』 pp. 145-154. くろしお出版

渡辺伸治**(2009)** :「ダイクシスの定義と下位分類」『言語文化研究』第 35 号 pp. 161-178. 大阪大学大学院言語文化研究科

Bühler, Karl **(1934/1982)**: *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache.* Fischer, Stuttgart, 1982. (Nachdruck von 1934).

Diewald, Gabriele Maria **(1991)**: *Deixis und Textsorten im Deutschen.* Niemeyer, Tübingen.

Sennholz, Klaus **(1985)**: *Grundzüge der Deixis.* Brockmeyer, Bochum.

方言習得に関する一考察：
非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に

田村幸誠[*]　松浦幸祐[**]

1. はじめに

関西地域以外の出身者が関西の大学に入学してきて、最初に関西出身の学生に直される発音の一つが、ユニバ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）であると関西地域以外の出身学生からよく聞かされる。自己紹介などでユニバを HLL（高低低）と発音した途端、関西出身の学生にユニバ（LHL）と自信を持って言い返されるのがお決まりらしい。一方で、そのような関西地域以外の出身学生も、関西で一年も生活すれば、自分の日本語が関西弁に影響されていると自覚を持つようになり、例えば、帰省した際に友人や家族との会話でつい関西アクセントが出てしまったり、アルバイト先での出来事を説明する時なども登場人物の直接話法の部分は関西弁にスイッチしてしまったりする。関西の大学で出くわすこのようなエピソードは大変微笑ましい。その一方で、少し失礼であるが、関西出身の筆者（田村）からすると、彼らが言うほどには彼らのアクセントは関西弁になりきっていないという印象も同時に受ける。

本論文の眼目は、大阪大学への入学に伴って関西（大阪）での生活を始め、(i) 関西（大阪）のアクセントには慣れて問題なく理解できる、(ii) 関西弁を話そうと思えばある程度話せる、と自負する関西地域以外の出身の大学生が、実際はどの程度関西アクセントを真似でき、習得できているのかに関して基礎的な調査を行うことにある。次節で本論文の背景と争点を提示する。まず、Shibatani (1990) に沿って方言習得の対象 (Dialect 2, (D2)) である京阪式アクセントの特徴を概観する（今回の調査は特に大阪大学の学生を調査対象としたので、以下、「大阪式アクセント」という用語を用い、「大阪式」と略す）。その上で、３節以降の調査とその考察すべきポイントを明確にするために、Kubozono (2018) の論考を概観する。Kubozono (2018) は、鹿児島の若い世代に観察される、東京方言の影響によるアクセントの変化を扱ったものであるが、鹿児島の若い世代のアクセント変化は、対応する東京方言の語（分節; minor phonological phrase）にアクセント核 (accent kernel (HL; ピッチの急激な下降)) が含まれるかどうかに強く影響されることを報告している。続いて、３節で実際の調査方法とその結果を示した後、４節で東京式アクセント（以下、東京式）を Dialect 1 (D1) とする大学生が、大阪で D2 (大阪式) を真似て習得する際にも Kubozono (2018) の指摘と同じ現象が起きるかという観点を中心に分析を進める。そのことと併せて、恐らく大阪での大学生活を通じて初めて聞いたと考えられる、大阪大学内で使われるキャンパス言葉など（e.g. みのぱん（箕面キャンパスでの一般教養科目）; 坂下（豊中キャンパスの位置する待兼山を下りた箇所））とそうでない語（e.g. 阪神 ; 足切り ; ニワトリ）の間で、方言習得の差が生じるか否かという問題、また、鹿児島地域のアクセント（以下、鹿児島式）を D1 とする大学生と比べて、大阪式のアクセント習得に差があるかなどの問題も考察する。５節は結語とする。

[*] 大阪大学 人文学研究科 言語文化学専攻; e-mail: tamura.yukishige.hmt@osaka-u.ac.jp
[**] 大阪大学 日本語日本文化教育センター; e-mail: matsuura.kosuke.cjlc@osaka-u.ac.jp

結論の大きな部分を先に少しまとめると（用語等は次節で説明する）、(i) 音調パターン全体（e.g. サカシタ LLLH（坂下）；アシキリ LLHL（足切り）；ニワトリ HHHH（鶏）；セッツ LLH（摂津）；オトコ HHL/HLL（男））を大阪式で発音できるかどうかに関しては、東京式の学生も鹿児島式の学生も、その復元率（正答率）は 50%に満たなかった。一方、(ii) 平板型（アクセント核なし）と起伏型（アクセント核あり）の差異を捉えられたかに焦点を絞ると、その復元率（正答率）は、東京式の学生も鹿児島式の学生も、80%を超えるものとなった。しかし、(iii) 大阪式の特徴である H 平板と L 平板という２つの平板型を適切に区別できた学生は今回の調査では見当たらず、東京式の学生であるか、（本来の方言環境に L 平板を持つ）鹿児島式の学生であるかに関わらず、大阪式の２つの平板型に対応する語をいずれも H 平板で発音する傾向が観察された。

2. 背景と争点

本節では、まず、方言習得の対象である大阪式アクセントの特徴を、Shibatani (1990) に沿って概観する。その上で、３節以降の調査と分析における論点をより明確にするために、Kubozono (2018) の論考を紹介する。

東京式と比べて、大阪式の最も大きな特徴の一つとして、アクセント核を持たない平板 (unaccentuated) アクセントに、２種類あることが挙げられる (Shibatani (1990:181–182))。例えば、東京式平板アクセントのサクラ LHH（桜）とウサギ LHH（兎）は、大阪式では、前者が HHH（サクラ-ガ HHH-H）、後者が LLH（ウサギ-ガ LLL-H）と区別して発音される。本稿では、前者を「H 平板」、後者を「L 平板」と呼んで区別することにする。東京式の平板アクセントは、H 平板の一種とみなすことができるが、東京式 H 平板が大阪式 H 平板と音調的に異なる点は、例えば、「桜が」の他にも、ウシ-ガ（牛が）において、大阪式が HH-H であるのに対して、東京式は LH-H となり、サカナ-ガ（魚が）では、大阪式が HHH-H であるのに対して、東京式は LHH-H となるというように、東京式では語頭のモーラが１つ下がった形で発音されることにある（Shibatani (1990:178–179)；金田一（1975:57））。

このことと関連して、アクセント核がある語においても、東京式では HH あるいは LL で語の音調が始まることが容認されないのに対して、大阪式では、アタマ（頭）やシズク（雫）に代表される HHL の発音や、カマキリ（蟷螂）やデッパ-ガ（出っ歯が）のような LLHL の発音も観察される（Shibatani (1990:159, 178–179)；服部（1950:157–158）；平山（1960））という違いがある。

ここで、図 1 を見てみよう。日本語のアクセントの分布を理解する上で、最も興味深い点の一つが、本州において、関西地域（図では縦線で示され Kyōto-Ōsaka とラベル付けされた地域）を挟んで、両側（図では横線で示され Tōkyo とラベル付けされた地域）に、同じタイプのアクセント類型が観察されることにある（Shibatani (1990:190); 金田一（1975: ３章）；調査が進んだより精緻なアクセント類型とアクセント地図は Uwano (2012:1422, 1429) を参照されたい）。

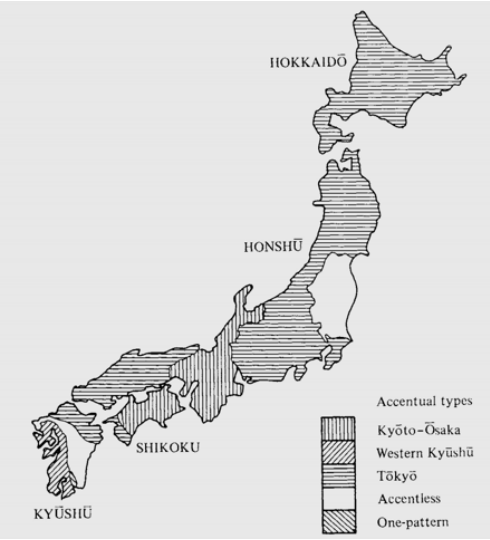

図１．日本語のアクセント特徴と分布の鳥瞰図（Shibatani 1990:211）

そして、このアクセント分布に関して、地勢的に関西地域だけを浮かび上がらせることに貢献する主な特徴こそが、先の段落で述べた、平板に H 平板と L 平板の２種類があること、そして、アクセント核がある語においても、HH や LL で語の音調を始められる点である（Shibatani (1990:190) 及び、金田一（1950:51）にある各方言のアクセント対応表を参照されたい）。よって、大阪式を D2 として方言習得する場合、取りも直さず、この２つの特徴にいかに対応するかが鍵となると考えられる。

さらに、図１において、鹿児島以西北の九州が斜線（Western Kyūshū）で示されていることに注目されたい。この地域のアクセント（例えば、鹿児島式）の大きな特徴は、東京式と同じように平板アクセントは１つのタイプしかないのだが、それが L 平板となる点である (Shibatani (1990:182–183))。したがって、鹿児島式では、大阪式で L 平板の語（e.g. ウサギ LLH；ウサギ-ガ LLL-H）と同様に、例えばキツネ（狐）であれば、キツネ LLH、キツネ-ガ LLL-H と発音される。加えて、起伏型の語においては、語の長さに関わらずアクセント核の位置が固定されるという特徴を示す。例えば、鹿児島式では、アメ HL（飴）、サカナ LHL（魚）、ケダモノ LLHL（獣）のように、後ろから２つ目の音節にアクセントが置かれる（Shibatani (1990: 183)；例は Kubozono (2012:1398) より引用。なお、伝統的に鹿児島式の L 平板は Type B、起伏式は Type A と呼ばれて区別されている（平山（1960）；Kubozono (2012:1938)；Western Kyūshū エリア内の地域差に関しては Uwano (2012) を参照））。L 平板を持つという鹿児島式の特徴は、鹿児島式の話者が大阪式を D2 として習得する際に、L 平板を元々持たない東京式の話者に比べて優位に働くか否かという点で、本稿にとって重要なポイントとなる。

続いて、Kubozono (2018) を概観する。Kubozono (2018) は、アクセントに関して、D1 が D2 から影響を受ける場合、D2 の対応する語が平板型か起伏型かが影響を与える最も主要なパラメータとして働くと主張するものである。この主張を端的に裏付けるものとして、ここでは表１を見られたい。

KJ ＼ TJ	'Accented' [+FALL]	'Unaccented' [−FALL]
Type A [+FALL] → [−FALL]	7%	43%
Type B [−FALL] → [+FALL]	25%	11%

表１. 鹿児島の若い世代の基礎的な名詞に見られるアクセント変化
(Kubozono 2018:288；オリジナルは Kubozono 2007)

表１において、KJ は鹿児島方言を、TJ は東京方言を表す。また、Type A は先の鹿児島式の起伏型を、Type B は先の L 平板を表す。この表が示しているのは、Type A（起伏型 [+FALL] ）が平板型 [−FALL] に変化するのは、東京方言（D2）の対応する語が平板（unaccented）である時の方が高く（7% vs. 43%）、また、Type B（平板型 [−FALL] ）が起伏型 [+FALL] に変化するのは東京方言（D2）の対応する語が起伏型（accented）である時の方が高い（25% vs. 11%）ということである。D2 の語の個別の音調パターン全体ではなく、あくまでその語にアクセント核があるか否かに反応していることが重要な点である。例えば、元の鹿児島式で L 平板（Type B）の「アオシンゴウ LLLH（青信号）」は、対応する東京式の LHHLLL という起伏型の発音が影響し、若者世代において LLHL というアクセントへと変化するが、生じた LLHL は D1 の鹿児島式で許されるアクセント核の付与であり（後ろから２つ目の音節にアクセント核が置かれる）、決して、LHLL や HLLL、あるいは、東京式そのままの LHHLLL などにはならないことが報告されている（なお、モーラ方言とシラビーム方言の違いで知られているように、鹿児島式は東京式、大阪式とは異なりモーラではなく、音節がリズム単位（rhythmic unit）として機能する（Shibatani (1990:160); 柴田（1962））。東京式と鹿児島式とで、アオシンゴウに対して付与される L と H の数が異なっているのはそのためである）。

3. 調査と結果

では、調査の概要とその結果に移ろう。調査は、東京式話者 10 名と鹿児島式話者 5 名を対象に、Zoom を介してオンラインで行った（kagoshima4 のみ対面式で行った）。参加者の決定にあたっては、両親のどちらかでも関西出身者が含まれる被験者や、大学入学以前に短期間でも関西に住んだことのある被験者は選定せず、大学生活で初めて関西弁のシャワーを浴びた被験者に限定した。調査は、一つ一つの語をスライド上に表示し、「関西弁で読んでください」と語りかける方式で行った。その際、「桜」のように、語を単独で読み上げてもらうだけでなく、「桜が咲く」などの文も読み上げてもらった。それぞれの語と文は２回ずつ読んでもらい、分析には１回目の発音のみを用いている。なお、このインタビュー調査は、大阪式の影響を避けるため、東京式話者である松浦が全て東京式で行った。

調査結果は下の表２、表３、表４に示される通りである。調査対象の語には、単純に高低をひっくり返すような答えを避けるため、３モーラ以上の語を選んだ。また、東京式の被験者に偶然、静岡出身者が５名いたため、東京式は首都圏（表２）と静岡（表３）で分けて示すことにした。表の縦列における「分類」とは、１は主に大阪大学のキャンパス語や、ごく近年に使われ出した若者言葉で、恐らく大学に入学するまで一度も聞いたことがないと考えられる語、３は日常語からランダムに選んだものである。２はその中間を意図している。表の「大阪式」とは、いわば「正解」であり、関西出身の阪大生４名の発音を元にしたものである。したがって、例えば「卒論（そつろん）」は、伝統的な大阪式では LLLH となるかもしれないが、関西出身の阪大生４名全員が

LHLL と答えたため、本稿での正解は起伏式の LHLL としてある。また、４名の発音が一致しない場合は、「みのぱん」の LHLL と LLLH のように、２つを正解の候補として残してある。表では、各被験者の「回答」に続いて、その正誤が示されている。まず、「音調」とは、被験者の回答が大阪式の音調パターンと完全に一致したかどうかを示している。また、「核有無」は、平板型・起伏型に関して正解したかどうかを、「核位置」は、起伏型において、HL の位置が大阪式（D2）と一致したかどうかをそれぞれ示している。

例えば、shutoken1 の「起伏」の項目「言社（げんしゃ、言語社会専攻の略）」を見てみよう（上から 10 個目）。この項目は、阪大内で使われる言葉なので分類は１であり、大阪出身の阪大生４名が全員 LHL と発音したため、「大阪式」には正解として LHL（起伏型）が示されている。これに対して、shutoken1 は「言社」を HHL と回答したので、「音調（パターン）」は不正解、「核有無」は正解となっている。また、「核位置」は HL の位置が大阪式と同じなので正解である（L<u>HL</u> と H<u>HL</u>）。

首都圏		分類	大阪式	shutoken1				shutoken2				shutoken3				shutoken4				shutoken5			
				回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置
L平板	バ先	1	LLH	LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正	
	坂下		LLLH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHLL	誤	誤		LHHH	誤	正	
	摂津	2	LLH	HLL	誤	誤		HLL	誤	誤		HLL	誤	誤		LLH	正	正		HLL	誤	誤	
	阪大	3	LLLH	HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
H平板	あかん	2	HHH	LHH	誤	正		LHH	誤	正		HHH	正	正		LHL	誤	誤		LHL	誤	誤	
	梅田		HHH	LHH	誤	正		HLL	誤	誤		LHH	誤	正		LHL	誤	誤		HLL	誤	誤	
	豊中		HHHH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		HHHH	正	正		LHHH	誤	正	
	タバコ	3	HHH	LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		HHH	正	正		LHH	誤	正	
	ニワトリ		HHHH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正	
起伏	言社	1	LHL	HHL	誤	正	正	LHH	誤	誤	誤	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正
	再履		LHL	LHL	正	正	正	HLL	誤	正	誤	LHH	誤	誤	誤	LHH	誤	誤	誤	HLL	誤	正	誤
	パンキョー		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤
	みのぱん		LHLL LLLH	LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正	
	難波	2	HLL	LHL	誤	正	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正
	とりき		LHL	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正
	阪神		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
	かまへん		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLHL	誤	正	正	HLHH	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤
	卒論		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHHH	誤	誤	誤	LHLL	正	正	正
	関電		LHLL	HHLH	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	LHHH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤	HHLL	誤	正	正
	あかんで		HHHL	LHLH	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤
	足切り		LLHL	LHHH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤
	座学	3	HLL	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正
	蛍		LHL HLL	HLL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正	
	男		HHL HLL	LHH	誤	誤		HLL	正	正		LHH	誤	誤		HHH	誤	誤		HLL	正	正	
	イチゴ		LHL	LHH	誤	誤	誤	HLL	誤	正	誤	LHL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤	HLL	誤	正	誤
	魂		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
	カマキリ		LLHL	HLLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤
	雷		HHHL LLHL	LHHH	誤	誤	誤	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LHHL	誤	正	正	LHHL	誤	正	正
	鈴虫		LHLL	LHHH	誤	誤	誤	LHHL	誤	正	誤	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正
	地下鉄		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHHH	誤	誤	誤	LHLL	正	正	正

表２．首都圏出身者を対象とした調査の結果

静岡		分類	大阪式	shizuoka1				shizuoka2				shizuoka3				shizuoka4				shizuoka5			
				回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置
L平板	バ先	1	LLH	LLH	正	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		LLH	正	正		LHH	誤	正	
	坂下		LLLH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正	
	摂津	2	LLH	LLH	正	正		LLH	正	正		HLL	誤	誤		LLH	正	正		HLL	誤	誤	
	阪大	3	LLLH	LLLH	正	正		LLLH	正	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
H平板	あかん	2	HHH	LHH	誤	正		LHL	誤	誤		HHH	正	正		HHH	正	正		HHH	正	正	
	梅田		HHH	LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正	
	豊中		HHHH	LHHH	誤	正		HHHH	正	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正	
	タバコ	3	HHH	LHH	誤	正		LHL	誤	誤		LLH	誤	正		LHH	誤	正		LHL	誤	誤	
	ニワトリ		HHHH	LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		LHHL	誤	誤		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正	
起伏	言社	1	LHL	HLL	誤	正	誤	LHL	正	正	正	HHH	誤	誤	誤	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤
	再履		LHL	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正	LHL	正	正	正	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤
	パンキョー		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤
	みのぱん		LHLL LLLH	LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHHH	誤	誤		LHLL	正	正	
	難波	2	HLL	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HHL	誤	正	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正
	とりき		LHL	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正
	阪神		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HHLL	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
	かまへん		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLHH	誤	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
	卒論		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正
	関電		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤
	あかんで		HHHL	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	HHHL	正	正	正	HHHL	正	正	正	LHLL	誤	正	誤
	足切り		LLHL	LLLH	誤	誤	誤	LLLH	誤	誤	誤	LHHH	誤	誤	誤	LLHL	正	正	正	LLHL	正	正	正
	座学	3	HLL	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤
	蛍		LHL HLL	HLL	正	正		LHL	正	正		LHL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正	
	男		HHL HLL	LHL	誤	正		LHL	誤	正		LHL	誤	正		HLL	正	正		HLL	正	正	
	イチゴ		LHL	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	HLL	誤	正	誤	LHH	誤	誤	誤
	魂		HLLL	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	LHLL	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
	カマキリ		LLHL	HLLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LLHL	正	正	正	LLHL	正	正	正	HLLL	誤	正	誤
	雷		HHHL LLHL	LHHL	誤	正	正	LHHL	誤	正	正	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正
	鈴虫		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正
	地下鉄		LHLL	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正

表３．静岡出身者を対象とした調査の結果

鹿児島		分類	大阪式	kagoshima1				kagoshima2				kagoshima3				kagoshima4				kagoshima5			
				回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置	回答	音調	核有無	核位置
L平板	バ先	1	LLH	HHH	誤	正		LLH	正	正		LHH	誤	正		HHH	誤	正		HHH	誤	正	
	坂下		LLLH	LHHH	誤	正		LLLH	正	正		LHHH	誤	正		LHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
	摂津	2	LLH	LLH	正	正		LLH	正	正		LLH	正	正		HLL	誤	誤		HHH	誤	正	
	阪大	3	LLLH	HHHH	誤	正		LLHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正		HHHH	誤	正	
H平板	あかん	2	HHH	LHH	誤	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		HHH	正	正		HHH	正	正	
	梅田		HHH	LHH	誤	正		LLH	誤	正		LHH	誤	正		LHL	誤	誤		HHH	正	正	
	豊中		HHHH	HHHH	正	正		LLLH	誤	正		LHHH	誤	正		LHLL	誤	誤		HHHH	正	正	
	タバコ	3	HHH	HHH	正	正		HHH	正	正		LHH	誤	正		LHH	誤	正		HHH	正	正	
	ニワトリ		HHHH	LHHH	誤	正		LLLH	誤	正		LHHH	誤	正		HHHH	正	正		HHHH	正	正	
起伏	言社	1	LHL	HHL	誤	正	正	HHL	誤	正	正	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正
	再履		LHL	HHL	誤	正	正	HHL	誤	正	正	HLL	誤	正	誤	HLL	誤	正	誤	HHL	誤	正	正
	パンキョー		LHLL	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤	HLLL	誤	正	誤

	みのぱん		LHLL	LLLH	LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正		LHLL	正	正		HHHH	誤	誤	
	難波	2	HLL		HHL	誤	正	誤	HHL	誤	正	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正
	とりき		LHL		LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正
	阪神		HLLL		HHLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HHLL	誤	正	誤
	かまへん		HLLL		LHLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	誤	HLHH	誤	正	誤	HLLL	正	正	正	HLHH	誤	正	正
	卒論		LHLL		LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正
	関電		LHLL		HLLL	誤	正	誤	HHLL	誤	正	正	HLLL	誤	正	誤	HHHH	誤	誤	誤	HHHH	誤	誤	誤
	あかんで		HHHL		LHLL	誤	正	誤	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	LHLH	誤	正	誤
	足切り		LLHL		LLHH	誤	誤	誤	LLHH	誤	誤	誤	LLHH	誤	誤	誤	HHHH	誤	誤	誤	HHHH	誤	誤	誤
	座学	3	HLL		HLL	正	正	正	HLL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤	HLL	正	正	正	HLL	正	正	正
	蛍		LHL	HLL	HLL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正		HLL	正	正	
	男		HHL	HLL	LHL	誤	正		LHL	誤	正		LHH	誤	誤		HLL	正	正		LHL	誤	正	
	イチゴ		LHL		LHL	正	正	正	LHL	正	正	正	LHH	誤	誤	誤	LHL	正	正	正	LHL	正	正	正
	魂		HLLL		HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正	HLLL	正	正	正
	カマキリ		LLHL		LLHL	正	正	正	HLLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LHLL	誤	正	誤	LLHL	正	正	正
	雷		HHHL	LLHL	LLHL	正	正	正	LHLL	誤	正	誤	LHHL	誤	正	正	LLHL	正	正	正	LLHL	正	正	正
	鈴虫		LHLL		LLHL	誤	正	誤	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	HHLL	誤	正	誤	LHLL	正	正	正
	地下鉄		LHLL		LHLL	正	正	正	LLLH	誤	誤	誤	LHLL	正	正	正	LHLL	正	正	正	LLHL	誤	正	誤

表４．鹿児島出身者を対象とした調査の結果

4. 分析

本節では、上の表２から４において得られたデータを分析することを目的とする。特に、(i) 音調パターン、(ii) アクセント核の有無、そして (iii) アクセント核の位置という３つの視点を軸に、この順で分析を行う。

まず、表２から４のうち、音調パターンの正答率のみをまとめた表５を考察することから始めよう。

音調正答率（%）		1	2	3	4	5	平均
東京式	shutoken	33.33	36.67	40.00	36.67	36.67	36.67
	shizuoka	50.00	53.33	40.00	56.67	43.33	48.67
鹿児島式	kagoshima	43.33	40.00	33.33	50.00	50.00	43.33

表５．地域ごとの音調正答率

繰り返しになるが、「音調」における正答とは、回答が大阪式の音調パターンと完全に一致することを意味する。調査前の予想に大きく反して、出身地域に関わらず、音調パターンの正答率は全体的に非常に低いものとなった。また、一人の被験者が飛び抜けてうまく復元できるといったことも予測したが、それも（被験者が 15 名と少なかったためかもしれないが）なかった。最も高い被験者（shizuoka4）でも約 57%であること、また、鹿児島式を D1 に持つ被験者を東京式の被験者と比べても、大阪式（D2）の習得に優位と言えるほどの差は見られないことを表５において確認されたい（東京式の中で首都圏の方が静岡よりも低い原因は後で述べる）。

地域に関わらず復元率が低いことの大きな原因は、やはり、大阪式特有の H 平板と L 平板の２つのタイプの平板が復元できていないことにある。以下、上の表２から４と照らし合わせながら読んでいただきたいのだが、L 平板（４例）の復元に成功したのは、首都圏出身者（５名）の結果では、計 20 トークン中、わずか１トークンであり、静岡出身者の結果においても、20 トークン中

７トークンとなっている。また、首都圏と静岡のいずれにおいても、誤答であったトークンは、「摂津」の誤答 HLL を除いて、全て、H 平板で回答がなされている。

さらに、興味深いのが鹿児島である。L 平板に関して、鹿児島式の被験者の正答率は、kagoshima2 以外の４名では、計 16 トークン中 2 トークンとなっており、東京式被験者と同等に低い。Kubozono (2018) の指摘通り、鹿児島の若い世代はかなり東京式の影響を受けていると想像できるが、ここで、２節でも指摘したように、鹿児島式は L 平板を持つ方言である点を思い出されたい。そうであるにも関わらず、復元できなかった 14 トークンは、全て H 平板で回答されている。例外である kagoshima2 は、L 平板の４トークン中３トークンにおいて正解している（モーラでなく、鹿児島式の音節で考えると全てに正解している）ものの、H 平板の５トークン中３トークンを L 平板で回答しており、やはり、大阪式の H 平板と L 平板の２つに対応しているとは言い難い。

H 平板に関しては、２節において、東京式と大阪式の違いとして語頭のモーラが東京式では LHH のように下がることを述べた。H 平板の復元に成功したのは、首都圏では 25 トークン中、わずか３トークン、静岡でも、25 トークン中、４トークンとなっている。H 平板の誤答に関しては、首都圏では 17 トークン、静岡では 19 トークンにおいて、語頭のモーラが下がった東京式 H 平板が用いられていることもわかる。

一方、鹿児島式の被験者は、H 平板の 25 トークン中 10 トークンを正解しており、東京式の被験者と比べてかなり高い正解率を示す。これは、上の表４で確認いただきたいのだが、鹿児島式の被験者が語頭の下がらない大阪式の H 平板を復元できているからである。もう少し詳しく述べると、上で、鹿児島式の被験者が L 平板を H 平板で置き換えるということを述べた。例えば kagoshima5 の回答を見てみると、L 平板と H 平板を合わせた都合９トークン中、全てにおいて、大阪式の H 平板を用いている。一方、kagoshima3 は、１例を除いて、全てに東京式の H 平板を用いている。kagoshima2 を除いた残りの２人（kagoshima1 と kagoshima4）は、大阪式 H 平板と東京式 H 平板がほぼ同数混ざる形で回答している（関西出身者からして、もし、東京式アクセントを D1 にもつ話者と鹿児島式アクセントを D1 に持つ話者で後者の方が大阪式アクセントが上手であると直感的に印象を持つ場合、それは大阪式の H 平板を用いる割合が東京式話者に比べて鹿児島式話者の方が高いことに起因する可能性があることを示唆する）。

東京式においても、例えば、コノ-サクラ-ガ（この桜が）が LH-HHH-H と発音されるように、他の語に連続する場合、H 平板は大阪式のように発音されうる（Uwano 2012 等）。つまり、実際の言語活動において、被験者である東京式話者も、大阪式の H 平板を発音したことがないわけではないはずである。それにも関わらず、文頭に生じた場合や、単独で発話した場合は、ほぼ大半の場合、最初のモーラが下がり、目的の大阪式アクセントからかなり外れた印象を与える発音となる。金田一（1975:74）は、この語頭のモーラが下がる現象を京阪式から東京式にアクセントが通時的に変化する中で起きた「労力の節約を図る」一つの軟音化（lenition）であると述べている。確かに、東京式において、例えばサクラは環境によって LHH とも HHH とも発音されるため、語頭が下がる現象は、音韻的に言えばアクセント核ほど重要ではないかもしれない。しかし、そうであるが故に、こと、D2 の習得という点に関しては、語頭が下がる現象は、L 平板と合わせて自然発話の中で非常に気づきにくい存在であることがデータから読み取ることができる。このことに加えて、鹿児島出身者のばらつきは東京式の習得度の差、つまり、一定数の鹿児島出身者にとって、大阪式は東京式（D2）を介した D3 とみなす必要があることを示唆していると考えられる。

では、アクセント核の有無の問題に移ろう。下の表６に示されているように、平板型か起伏型のどちらか、ということになれば、その復元率は劇的に向上することが分かる。東京式話者でおよそ 86%、鹿児島出身者で 90%が正解している。Kubozono (2018) が指摘するように、D2 に対し

てはまずアクセント核の有無に耳が向いていることが裏付けられるかもしれない。そして、想像ではあるが、非関西地域出身者の大阪式アクセント習得の達成感はこのレベルで得られているのではないかと考えられる。

核有無正答率（%）		1	2	3	4	5	平均
東京式	shutoken	80.00	86.67	83.33	66.67	86.67	80.67
	shizuoka	96.67	90.00	86.67	96.67	86.67	91.33
鹿児島式	kagoshima	96.67	93.33	86.67	83.33	90.00	90.00

表６．地域ごとのアクセント核有無正答率

しかし、起伏型におけるアクセント核の位置に関しては、表７に示したように、正答率がかなり下がるものとなる。まず、ここでも東京式が約 61%、鹿児島が約 57%となっており、いずれかが大阪式の習得に優位といえる程の差は観察されないことを確認されたい。

核位置正答率（%）		1	2	3	4	5	平均
東京式	shutoken	55.56	50.00	61.11	44.44	61.11	54.44
	shizuoka	66.67	72.22	72.22	66.67	55.56	66.67
鹿児島式	kagoshima	55.56	50.00	55.56	55.56	66.67	56.67

表７．地域ごとのアクセント核位置正答率

その上で、地域ごとに個別に観察していくことにしよう。まず、ひとつ前の表６において、同じ東京式地域であるが、首都圏と静岡に 10%ほどの正答率の差があった。これは首都圏の話者の方が起伏型を平板型として発音する割合が高いからである（e.g. 足切り LLHL→LHHH。これが、先の表５において、両地域の音調正答率の差を引き出す最大の要因になっている）。表７に戻ると、首都圏と静岡に共通するアクセント核位置の誤答の主要な原因は、アクセント核の位置を大阪式に比べて１つ前のモーラにおいてしまうことにある（e.g. イチゴ LHL→HLL（東京式では LHH）；再履 LHL→HLL（東京式では LHH））。首都圏では誤答 34 トークンのうち 25 トークンが、静岡では 28 トークン中 19 トークンがこのことに起因する間違いである。先に、京阪式から東京式へのアクセントの歴史的変遷に関して、金田一（1975:74）の軟音化（lenition）を取り上げたが、それとは反対に、アクセント核を１つ前におく現象は、D2 を真似るが故の硬音化（fortition）が働いているものと考えられないだろうか。確かに、D1 では認められていない語頭の HH や LL の連続を回避するためと見ることもできる（e.g. あかんで HHHL→LHLL）。しかし、イチゴ LHL→HLL（東京式では LHH）のように、D1 でも容認される音調パターンであっても、アクセント核を前にズラす例が多く見られることを考えれば、硬音化（fortition）も要因であると捉えることはごく自然であると言える。この点に関しては、よりデータを充実させ、今後の課題としたい。

鹿児島出身者に関しては、まず、表７にあるように、首都圏の東京式話者と異なり、起伏型を平板型にする割合が少ない。さらに、鹿児島のアクセント位置の誤答に関しても同様にアクセントを１つ前にズラす例が、30 トークン中 17 トークン（e.g. パンキョーLHLL→HLLL）が観察される一方で、東京式話者にほとんど観察されない、後ろに１つズラす例も 13 トークン観察される（e.g. 阪神 HLLL→HHLL；難波 HLL→HHL；関電 LHLL→HLLL）。この鹿児島出身者のアクセ

ント位置の前後へのズレは、音節がリズム単位になっていることが強く関与すると考えられ、東京式と同じように考えることはできないと考えられる。

最後に、分類１，分類２，分類３において正答率の差が生じたかどうかを考察しよう。

分類	shizuoka					shutoken					kagoshima					平均
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
1	33.33	33.33	33.33	16.67	16.67	33.33	16.67	16.67	16.67	16.67	16.67	50.00	16.67	16.67	0.00	22.22
2	50.00	58.33	33.33	66.67	58.33	33.33	41.67	41.67	33.33	33.33	33.33	25.00	41.67	50.00	50.00	43.33
3	58.33	58.33	50.00	58.33	41.67	33.33	41.67	50.00	41.67	50.00	66.67	50.00	33.33	66.67	75.00	51.67

表８：語彙分類ごと（分類１，分類２，分類３）の音調の正答率

表８では、関西に来て初めて聞いたと考えられる分類 1 が最も低い数字になっている。これは、分類１が最も高い正答率になるという調査前の予想とは異なる結果であった。もちろん、分類１に割り当てられた語彙数が分類２と分類３に比べて少ないため、より正確な調査が必要であることは確かである。しかし、関西で初めて聞いた言葉だからと言って、必ずしも他の語彙とかけ離れて「正しく」大阪式を覚えられるわけでもない、ということは言えよう。

5. 結語

本論文の目的は、大阪大学への入学に伴って大阪での生活を始め、(i) 大阪式アクセントには慣れて問題なく理解できる、(ii) 大阪式アクセントを話そうと思えばある程度話せる、と自負する関西地域以外出身の大学生が、実際はどの程度大阪式アクセントを真似でき、習得できているのかに関して基礎的な調査を行うことにあった。２節で議論したように、大阪式アクセントの特徴は、H 平板と L 平板という２つの平板アクセントを持つことにあるが、東京式を D1 に持つ被験者 10 名と鹿児島式を D1 に持つ被験者５名を対象に行った調査の結果からは、H 平板と L 平板を使い分けられる被験者はいなかったこと、また、音調パターンの復元率がいずれも 50%に満たなかったことを指摘した。さらに、関西に来て初めて聞いたと考えられる語彙であっても、そのまま完全な大阪式が習得されるわけではないことも指摘した。

参考文献

服部四郎 (1951/1984) 『音声学』岩波書店, 東京.

平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版, 東京.

金田一春彦 (1975/1995) 『日本の方言：アクセントの変遷とその実相』教育出版, 東京.

Kubozono, Haruo (2007) “Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese,” *Tones and Tunes: Studies in Word and Sentence Prosody*, edited by Tomas Riad and Carlos Gussenhoven, Mouton de Gruyter, 323–351.

Kubozono, Haruo (2012) “Varieties of pitch accent systems in Japanese,” *Lingua* 122, 1395–1414.

Kubozono, Haruo (2018) “Bilingualism and Accent Changes in Kagoshima Japanese,” *Tonal Change and Neutralization*, edited by Haruo Kubozono and Mikio Giriko, Berlin, De Gruyter Mouton, 279–329.

柴田武 (1962) 「音韻」国語学会編『方言学概説』武蔵野書房, 東京, 137–161.

Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press, Cambridge.

Uwano, Zendo (2012) “Three types of accent kernels in Japanese,” *Lingua* 122. 1415–1440.

現代フランス語の là の機能について

春木　仁孝

1．はじめに

本稿では現代フランス語の là を取り上げて考察する。本来は場所副詞である là は、特に話し言葉において文頭、文中、文末と様々な位置で用いられて、現在ではディスコースマーカー的な様相を呈する用法も多くなっている。本稿では実例を通して là の用法を整理・検討してその意味と機能をできるだけ明らかにしたい。

考察に入る前に là の本来的、基本的な機能と、この語を取り巻く幾つかの現象について概観しておく。là は基本的には場所副詞であり発話者からやや離れた場所を指し、日本語の「そこ、あそこ」や英語の there に対応しており、発話者を中心とする場所を指す ici「ここ、こちら」と対をなしている。là と(i)ci は voici：voilà、celui-ci：celui-là、ce-livre-ci：ce livre-là のように語構成要素や付加語尾としても対比的に用いられる[1]。「あちらこちら」と言う場合は ici et là と言うが、一方 çà et là「あちこち（に）」という表現もある。çà は古い副詞の名残りでほぼ ici と同じ意味であり、この表現や deçà など一部の表現に残っている。çà et là は ici et là よりもより限られた空間に対して用いられ、あたりに色々な物が雑然とある、あたりに色々な物を散らかすといったような文脈で用いられることが多い。

さて、là は(i)ci と対比されると言ったが、現代フランス語では là と(i)ci の対立が中和される傾向が強い。距離の違いにかかわらず、voilà が voici の、celui-là が celui-ci の、là が ici の領分を浸食しているのである。たとえば小さい子やペットに「こっちへおいで」と言う時には Viens ici !よりも Viens là !と言うことが多い。「こちらです」と人を案内するときも Par ici.よりも Par là.と言うのが一般的である。買い物をするときにも「これとそれをください」は celui-là だけを用いて Donnez-moi celui-là et celui-là.となることが多い。いずれにしろこれらはすべて指示的表現であり指示行為を伴なうので混乱は起こらない。より離れた場所を指したい場合は là-bas という補強表現が用いられる[2]。là と(i)ci の対立が中和される傾向が強いと述べたが、対立が中和されているように見える場合でも ici と là の間に違いが無いわけではない。単純化して言えば ici は発話者のいる場所その物を指し、là はより漠然と発話者のいる場所を包み込むように指していると言える。このような là の性格は本稿で検討していく là の様々な機能とも関係している。

場所表現が時間表現へとその適用領域が拡張されるのは普遍的なことであり、たとえば d'ici là「今からそのときまで」のように用いられる。さらに意味が抽象化されて「漠然と状況、事柄を指す」といった説明を辞書にも見ることができる。

---

[1] 語構成要素としては ici は(-)ci の形で現われる。ici の語頭の i は代名詞的要素を強める接頭辞である。現代では用法は限られているが古くは celui, celle などに対して icelui, icelle のような形もあった。ついでながら comme ci comm ça の ci は直接(i)ci からではなく、ceci の縮約と考えられ、イタリア語の表現 cosi cosi から作られた古い表現 couci-couci から後に couci-couça となった表現との相互的な影響が想定される。

[2] 一方、ici-bas は成句的に「この世、現世」という意味で用いられる。

最後に、ci は付加語尾としてだけでなく語頭でも ci-après「以下に」、ci-joint「添付の」のように用いられるが、同じく là も上で引いた là-bas だけでなく là-dedans「その中に」、là-dessus「その上に／それについて」のように語頭付加時としても用いられる。これらは英語の therein や thereupon などと構造も機能も類似している。語頭での用法においては ci-dessus と là-dessus のように形式的には若干のペアが存在するが、意味的には(i)ci と là の 2 項的対立は見られない。

以下では場所表現から時間表現、さらには発話状況を指す用法への拡張などの実体を実例を通して検討し、現代フランス語における là の機能をできるだけ明らかにしたい。

2. 空間から時間、発話状況へ

2．1.　空間的用法からの拡張

純粋に場所を表わしている例は以下の様なものである。

(1)（商品を説明している訪問販売員に）

— Pas mal. Et ça, *là* ?　「悪くないね、でそこにあるそれは？」[3]

(2) Monsieur le président est *là,* sur le plateau.

「会長はあそこ、舞台の上におられます。」

(3) Tu veux aller chercher Ernest ? Nous on reste *là*.

「君はエルネストを迎えに行ってくれるかい。僕たちはここに残るから」

(1)では ça が物を、là が場所を指している。指示行為は物と場所を同時に指すことになる。(2)では視線であれ何らかの指示行為を伴なう。(3)では on reste ici と言っても実質的な意味は同じである。まさに ici の領域を là が奪っているのである。一方、être là という表現は、よく知られているように場所ではなく存在そのものを表わす。

(4) Quelqu'un est *là* ?　「誰かいるかい」

(5) — Matthieu est *là* ?　— Oui, il est *là*.「マチューはいますか」「うん、いるよ」

このような là は存在を表わす là (là existentiel)と呼ばれることもある。この存在を表わす là は場所的な意味からの直接的な拡張と考えることができる。

(6) — Éric, t'es *là* ?　「エリック、いるのかい」

— Oui, je suis *là*.　「うん、いるよ」

— Mais t'es où là ?　「いるって、どこに」

— Je suis ici dans le jardin.　「ここだよ、庭だよ」

この例では je suis là は指示行為を伴なわず存在だけを表わしているので、続けてより正確な場所を聞く疑問文が成立するのであり、この文脈ではより厳密に場所を表わす ici が使われている。（t'es où là の là はその前の発話の là とは性質を異にするもので、これについては後に見ることにする。）この存在を表わす là は肉体的な存在だけで無く、意識についても用いることができる。以下は、あるエピソードを話して聞かせていた相手がその話から

[3] 短い例には日本語訳を付けるが、長い例では必要な部分を適宜本文中などで訳するに留める。

何かを思い出して意識がその記憶の方に行ってしまっている時に発せられたものである。

(7) Tu m'écoutes ? Oh ! Oh ! T'es toujours *là* ? (Pascal Ruter：284)

「聞いてるのかい、おいおい、大丈夫かい（←意識が飛んでいるんじゃないかい）」

単に場所を表わしているように見える là もよく見ると時間的な側面も合わせ持っている場合や、同時に状況をも表わしている場合が多いことに気付く。

次例は精神的・肉体的に病んで病院にいる人が自問している場面である。

(8) Qu'est-ce qu'on fout *là* ? Pas *là*, dans cette pièce, mais *là* même en vie ?

(Line Papin：123)

「自分は一体何をしているのだろう、ここ、この部屋でというのではなく、人生において」

この例の最初の là は具体的な場所を表わしているのではなく、「自分は今人生のこの時点において一体何をしているのか」と、自問全体をいわば発話状況に結びつける働きをしている。ただ、今現在は病院にいるので、心の中で発した là という言葉に対してまるでそれを聞いて第 3 者が誤解するといけないかのように「いや、今、ここ、この病院の部屋でというのではなく」「今まさに自分の人生のこの時点において」と補足・確認しているのである。

この例の Qu'est-ce qu'on fout *là* ?の là に関連して以下の二つの例文を比べてみよう。

(9a) Qu'est-ce que vous faites ? 「お仕事は何をされているのですか」

(9b) Qu'est-ce que vous faites *là* ? 「（ここで）何をしているんですか」

(9a)は仕事を尋ねるときによく使われる表現である。より丁寧には dana la vie を最後に付け加えることもある。一方、(9b)の là は起源的には相手が今いる具体的な場所を指していたのだろうが、このような発話では「何をしているのか」という発話内容を発話の状況に結びつける役割をしている。そのことにより仕事を尋ねる (9a)とは違って「今まさにそこで」何をしているのかと行為について問うていることが明らかになる。

là は発話を発話の状況に結びつける役割をしていると述べた。(9b)の là は確かに聞き手（および話し手）がいる場所を指しているには違いないが、それだけではなく後にも見るように結果的に相手がその現場にいるという状況、あるいはその現場で何かしていること自体に対する驚きや詰問的な響きをその発話に与えている。

次例においても一見、là は場所を表わしているように思える。

(10) Quand j'ouvre la porte de la chambre 22, *là* c'est une tout autre histoire：M. Richard se tord de douleur, la main posée sur sa poitrine. (Sophie Tal Men：86)

病院での一場面を述べるこの例は、それまでの回診では何の問題も無かったが 22 号室の状況はすっかり違っていたと述べている。ここでは là は単に 22 号室という場所を表わしているのではなく、患者が苦しんでいるという事態が起こっている場としての 22 号室、つまりは発話者が見ている（体験している）事態、状況を指している言える。状況の具体的な説明は M. Richard 以下の発話で導入されるのだが、その状況は 22 号室を明けたときに既に存在していたのである。この là に訳をつけるとすると「そのとき眼に入ってきたもの（状

況）は」のようになる。

2．2．時間的な用法

次に時間を表わしていると考えられる là の例を見ていくが、この場合も時間から状況へと意味が拡張していくのが見られることが多い。

(11) C'est *là* que mes cauchemars ont commencé. Nuit après nuit.(*13 à table 2022*：47)
「まさにそのとき、私の悪夢が始まったのです。」

これは従兄弟が行方不明になったという話を聞いて、自分が従兄弟を殺してしまったと思い込んで悩んでいる人が自分の悩みを説明している場面である。この là は「そのときに」と訳せるが、「（その話を聞いた）まさにそのときに今私を苦しめている悪夢が始まった」ということであり、là は話し手がずっと苦しんでいる悪夢という重要な事態が始まった時点、そしてその状況を指している。

(12) Elle m'a embrassé sur la joue, elle est sortie du café, elle est partie sans se retourner et *là*, j'ai réalisé deux choses：je ne connaissais pas son nom, et à peine partie, elle me manquait déjà. (Marie-Sabine Roger：158)

là を含む部分は「まさにそのとき私は二つのことに気付いた」と訳せるが、「知り合ったばかりの女性が去ってしまった」「まさにそのとき」に、「彼女の名前も知らないばかりかすでに彼女のことが恋しいと感じている」ことに気付いたのであり、là はその直前に生起した状況とその直後に語り手が抱いた気持ちとを強く結びつけているのである。その意味でこの là はやはり単なる時間指示だけではなく語り手があることに気付いた重要な時点、その時の状況を示し、語り手の思いを読み手に強く提示することに貢献している。

(13) （原稿の出版を断られたショックで動けなくなってしまった人に対して編集者が次の人が来るのでと言ってその人を椅子に乗せたまま他の場所へ押していく）
— (regardant sa montre) Écoutez pour le moment, je vais vous déménager parce que *là*, j'ai vraiment besoin de mon bureau... (Anna Gavalda：153)

話し手は時計を見ながら言葉を発しているが、この例の là は「もうこの時間なので」というよりも、「この時間になって次の（大事な）約束があるので」と、確認した時間から生じる状況を念頭に置いて用いられていると考えられる。

(14) — Pourquoi tu nous l'as jamais dit avant ? demande Paquita.
Je la sens un peu blessée.
— Si je te l'avais dit, tu m'aurais cru ?
— Ben non, tiens, c'te affaire !
— Et *là*, tu me crois ?
— Ben n... (Marie-Sabine Roger：68)

ここではあることに関して Paquita に家族のことを説明した場面である。この場面の là も maintenant とすることができる。しかし là を使うことでやはり「（以前なら信じなかったと言う場が）しかし今回のこの状況の中では私の言うことを信じてくれるのか」のよう

なニュアンスになり、là を用いることで対比的に現在の状況が強く意識される。

(15)（街頭から実況されるクイズ番組の司会者を誘拐する計画（冗談）を話している）

— On arrête sa bagnole, il sort, et *là*, paf, ni une ni deux, on l'emporte. En quelques secondes, on l'évapore. (Pascal Ruter：63)

この例では「（車から司会者が出てきたら）そのときにうむを言わせず」と時間的経過のある一点を指しているとも言えるが、「うまく司会者が車から出てくる」という状況が生じたらというように、むしろ予想されるその状況をより問題にしていると考えられる。

このように単に時間的な繋ぎをしているように見える場合も、là は発話時点のある特定の状況を想起させる働きが強いと言える。

(16) Je stoppe le fenwick, n'étant pas sûr d'avoir bien entendu.

— Tu viens de dire quoi, *là* ? Qu'est-ce que ma mère vient faire là-dedans ?

（註：fenwick＝フォークリフト（商標名））(Sophie Tal Men：172)

この例も「今なんて言ったんだい？」と時間的にも訳せるが、もはや時間と言うよりも相手が何か言ったという行為、さたらにはその言葉を指していると考えるべきであろう。実際、この場面では相手の言った言葉はある程度聞こえているものの、その中に ta mère という言葉があったので「一体私の母親がこれに何の関係があるのだ？」とあるように、相手の言動に引っかかりを感じて多少とも非難しているニュアンスが感じ取られる。

2．3．関係（対比）を表わす là

次に関係または対比を表わしていると思われる例を検討してみよう。ここで関係を呼ぶのは「それについては、そのことに関しては」のような意味を表わしている場合であり、多くは発話の最初、もしくは最初近くに用いられ、et là, mais là, alors là, là encore など接続詞や副詞とセットになっている場合が多い。これらの例では là は、その発話を先行文脈で導入された発話状況に強く結びつける役割を果たしている。

(17)（パーティーに潜り込む算段はついたが、女の子をものにするためには送っていくと誘うための車がいると考えたところで）

Et *là*, la situation est critique. Franck n'a pas son aspirateur à belette：en révision, et Alexandre n'a pas la voiture de sa mère：elle est rentrée à Paris avec.

（註：aspirateur à belette「女の子を引き寄せるかっこいい車」）(Anna Gavalda：92)

この例は、「で肝心の車に関しては（自分たちが置かれている）状況は最悪だった」のように訳せる。

この種の là は「それに関しては」のような訳ができる場合が多いと言ったが、以下の例ではそれがさらに明示的に現われている。

(18) En ce qui concerne la convalescence de Vanessa, *là* aussi, Maryse avait, bien entendu, une réponse à toutes les questions et interrogations.

(Bruno Combes：159)

この例は en ce qui concerne「～に関して」で導かれた句で始まるが、その直後にある là

は En ce qui concerne la convalescence de Vanessa 全体を受け直しており、「ヴァネッサの回復状況のことだが、それについても」のように訳せる。

既に述べたように、この種の用法では là の前後に接続詞や副詞を伴なっていることが多く、先行文脈の内容が強く提示される効果は対比のニュアンスを強めるそれらの接続詞や副詞の働きが大きいとも考えられる。以下の例は絵についての議論であるが、「醜いものも描くことができる」と言ったあとで「でもその場合も」と là を用いて続けている。ここでも mais と encore の寄与が大きい。

(19) — C'est l'art de mélanger les couleurs pour faire quelque chose de beau.

— Ou de laid, pourvu que ce soit expressif et que ça crée des émotions. On peut aussi peindre la laideur. Mais, *là* encore, il faut saisir l'essence de la peinture.

(Marc Trévidic : 81)

仮に関係または対比を表わす là と呼んだが、先行文脈の内容を発話の頭で主題として取り立てていると考えることもできる。日本語にする場合も「～に関しては」、さらに対比が強ければ「～の場合は」のように訳せることも多い。

以下は祖父と孫が買ってきた子犬の犬種を父親が尋ねたのに対して祖父がおまえはどうして何でも分類したがるのかと怒った場面での会話である。

(20) — Ne te fâche pas, bougonna mon père. C'était juste pour savoir. Parce que souvent on dit « c'est un caniche », « un labrador », « un... ».

— Ben *là* non, on dit juste « c'est un chien ». Un chien croisé chien. Point à la ligne ! (Pascal Ruter : 27)

là を含む箇所を分かりやすいように補って訳すと「(そうかも知れないが) この場合は／この犬については違う、(「これは～犬だ」とかは言わない、) 単に「これは犬だ」と言うだけだ」のようになるだろう。結局 là は先行文脈で導入された要素や状況を他の場合と対比して強く提示しているのである。

文頭の例をもう一つ挙げておこう。以下は画家である Paul が脚韻について自分の考えを文章にまとめている場面である。

(21) *Là*, ça devient intéressant, pensa Paul. Il se remit à écrire. (Marc Trévidic : 91)

この文の直前には語り手である Paul が脚韻について書いた文章が数行に渡って書かれている。ここで考えるべきことは指示的な語である là と ça がこの発話には並んで用いられている点である。là はこれまでも見てきたように直前に導入された要素や状況を指すが、ここでは語り手が書いたものとして引用されている数行の文章がそれになる。一方、主語としての ça にはこれまでも春木(2014)などで論じてきたように何かを指示していない場合（例 : ça sent bon !）も多いのだが、ここでは指示的に用いられていると考える。それでは ça は何を指示しているかというと、直前の文章の内容も含んで脚韻について考えてそれを文章にまとめるという語り手が現在行っている行為全体を広く指しているのである。その行為がある程度進んで、今書いた文章の内容を考えるとだんだんと興味深いものになって

きたと言っているのである。日本語訳を試みると、「ここに至って（この脚韻についてのまとめも）なかなか興味深いものになってきた」ぐらいだろうか。ここでは副詞や説属詞も伴なわず、また「～に関しては／～の場合は」などの訳はできないが、それ以前のものと対比しているという点では(17)~(20)の例の là と機能は実質的には同じであると考えられる。

ところで先行文脈の内容に関して「それについては」という意味で用いられる là-dessus という語があるが、こちらはここで問題にしている là の用法よりも、発話内での役割は内容的には軽いと思われる。用いられる位置も発話の頭よりも、発話内、発話末であることが多い。発話の頭で主題を導入するという機能は無く、たまたま発話の頭に用いられても、問題となっている状況を強く提示する機能はない。

(22) Je sais presque rien *là-dessus*. 「それについてはほとんど知りません」

2．4．念押し、確認を表わす là

一方、発話末に現われる là の用例の中には強さの程度には幅はあるものの、念押し、確認のようなニュアンスを付け加えているように思える例も多い。

(23) ― J'ai pas trop le temps, *là*. Je dois y aller. Tu peux venir, si tu veux.

(Marie-Sabine Roger：147)

「悪いけど今は時間がないいんだ、行かなくちゃ、来たかったらついて来てもいいよ」

この là は maintenant と置き換えられるようにも思える。しかし「悪いけど今は」と訳したように là を使うことで状況説明はされないものの話し手が置かれている状況が、相手の話を聞く時間が無い程度には重大であるということを暗に示すことができるのである。

(24) （電話で）― Tu viens pas avant midi OK ? Je suis crevé je veux dormir, *là*, sinon j'ouvre la porte et je te fracasse la tête avec une bouteille.

(Raphaël Haroche：137)

この例の là は「とにかく（今は）」のように訳せるが、「（今は）非常に疲れていて、とにかく眠りたい」という状況であることを強く相手に伝えたいというニュアンスで用いられている。

例(6)の Mais t'es où là ?の là もこの念押し、確認の là と考えられる。

以上のような là の用法とも密接に関連するが、Claude Daneton は Figaro 電子版の記事(https://www.lefigaro.fr/langue-francaise/expressions-francaises/2018/01/26/37003-20180126ARTFIG00007-ici-et-la-ne-faites-plus-la-faute.php)で、90 年頃から定型表現の後に là を付加するという現象がちょっとした流行になったと言って以下の様な例を挙げている。

(25) Tais-toi, là!　Tu nous fatigues, là!　Il est sympa, là　Rien à cirer, là.

Daneton はそう述べた後に On peut dire que c'était abusif, là!と皮肉っぽい結論で文を終えており、これらの là は必要のない要素のように考えているようである。しかし、このような là についても、当該の発話を話し手が置かれている状況、または眼の前で起こっている状況により強く関係づけるという役割を認めることはでき、必ずしも不必要なものであるとは言えないだろう。

この種の発話末に現れる là を、多くの辞書が「直前の言葉の反復、強調」などとして副詞の là と区別して間投詞としているが、その機能を考えた場合、やはり副詞とされている là と連続的なものとして考えるべきである。

2．5．非難の là

発話末で確認や念押しの役割を果たしている là について見たが、一方で発話末に用いられる là の中には(16)の例も含めて聞き手あるいは第 3 者の言動に対して、驚いたり、あきれたり、非難しているニュアンスを表わしているように思える例がよくある。

(26)（新型歩行器を勧めた訪問販売員に年配の男性が腹をたてて）

— (...) Est-ce que vous pourriez me dire à qui est destiné tout votre bastringue, *là* ? (Pascal Ruter：39)

(27) — Tu me parle de quoi, *là* ? Ça ne te regarde pas... (Sophie Tal Men：172)

(28)（精神科に妻を連れてきた男が妻についてひどいことを言ったのに対して医者が）

Il parlait de quoi, là *? D'un appareil ménager ?* Avait-il le droit et le pouvoir de la forcer à venir à l'hôpital ? (Sophie Tal Men：79)

(29) *Et puis quoi encore ? Tu ne veux pas cent balles et un Mars, pendant qu'on y est ?*

— Tu ne crois pas que t'exagères, *là* ? (...) Responsabilise-toi un peu, Baptiste ! (Aurélie Valognes：19)

この種の発話は疑問文の形をしていても、驚きや非難、時に拒否などを表わしており発話末の là がそのニュアンスを強める役割をになっている。とは言っても、là そのものに非難などのニュアンスがあるのではなく、非難や驚きを表わす発話末に用いられることで当該の状況と驚きや非難を表わす発話の内容が強く対比され、結果的に非難や驚きの意味が強められると考えられる。

3．状況を表わす là から名詞的な用法へ

là を用いた定型的な発話に以下のようなものがある。

(30) C'est là le problème.

(31) La question n'est pas là.

(30)の là も本来的には先行文脈の内容を受けて「そこに問題がある」と状況を指していたものが、「それが問題だ、それこそが問題だ」のようなニュアンスで用いられるようになったものである。一方、(31)は「問題はその点にあるのではない」「問題はそれではない」とでも訳せるだろう。日本語ではいずれも là を副詞的に訳すこともできるが、代名詞的に訳すことも可能である。là が代名詞的に解釈できるということに関しては、(31)の例に類似した以下の様な用法も考慮する必要がある。

(32) — Et ça figure aussi dans votre règlement qu'une interne se fasse tabasser par un patient dans la rue, peut-être ?

— Euh, non..., recule-t-elle. Bien sûr que non ! Mais *là* n'est pas la question.

(Sophie Tal Men：260)

(33) （秘書が雇い人の妻に嘔吐薬を飲ませたことを責められ、実は雇い人に思いを寄せていたことを告白し、どうせ私は魅力的ではないですものね的なことを言った後で）

— Vous êtes une très jolie femme, mais *là* n'est pas le propos ! poursuivit Maximilien. Vous avez empoisonné Romane, nom de dieu ! À cause de vous, elle a été malade comme un chien ! (Raphaëlle Giordanao：297)

(34) （離婚した女性が、子供達は父親に会いたいとは言わなかったのかと問われて）

— Ils ont demandé à le rencontrer à dix-huit ans. Mais ils n'avaient rien à se dire. Ensuite, ils se sont passés de lui. *Là* n'est pas l'essentiel.

(Jean-Christophe Rufin：43)

それぞれ「そのことは問題ではない」「それは本題ではない」「それは肝心なことではない」のように訳せる。ここで問題になるのは Là n'est pas la question.は La question n'est pas là.の倒置文なのかどうかという点である。先ず構文的には、そして起源的には là で始まる文は対応する là で終わる文の倒置文であると考えられる。たとえば(31)は Là n'est pas essentiel.のように名詞 l'essentiel を形容詞に置き換えるのは難しい。つまり là は名詞主語にはなりえないのである。しかし実際の用例を検討すると、意味的には文頭の là は明らかに先行文脈の内容を指して主語的な役割を果たしている。 以下の例ではそのことは一層、明らかであろう。

(35) Satisfait ou insatisfait, *là* est la question.

「満足しているのかしていないのか、それが問題だ」

ハムレットのあの台詞のフランス語訳が là est la question であるように、この例の後半の部分は英語であればまさに that is the question となるところである。

4. 結論にかえて

先ず là は ici と対比される場所副詞であり、実際、単純に場所を指している用法も多い。また場所的用法が抽象化されて、状況的に今ある段階にあるというような意味で用いられる場合もある。そんな là が、次第に発話者がいる場所をも含む広い場所、そして発話の場、さらには発話状況を指すようにその機能が拡張されていった。そして単に発話の場の状況を指すだけで無く談話の流れの中で当該の発話を発話状況に強く結びつけるというディスコースマーカー的な働きをもするようになった。発話状況というのは当該の発話自体が発話と共に提示する場合もあるが、多くの場合は先行文脈で導入されて、当該の発話の時点においても存続している。時間的経過に重点がある場合は、「そのとき、今」などと訳せる場合もあるが、そのような場合も実際は「そ（こ）の状況の中で」のように単に時間的というよりも、時間の経過によって生まれた状況を指していると考えられる。さらに là が実質的に発話の最初に用いられている多くの場合、先行文脈で導入された発話状況と当該の発話が対比的に結びつけられて、là は「～については」「～の場合は」というように主題を

表わすことも多くある。このような場合とも密接に関係して、là がまるで名詞主語のように振る舞っている *là* est la question のようなタイプの発話も存在している。

一方、発話末において見られる là は辞書においては間投詞とされることが多いが、念押しや確認と考えられる場合も、結局は当該の発話を発話状況に強く結びつけるという意味においては、là の他の用法とも連続的に捉えるべきであろう。

本稿で取り上げた là の機能は、筆者がこれまでに研究してきた ça の機能ともある程度似ているところがある。ça は指示的な場合も単に何かを指すのでは無く、対象となるものを取り巻く全体的な事態を指している。さらに ça fume !「なんか煙っているよ」のような発話では ça は何かを指しているのではなく、煙るという事態を発話者がまさに経験していることを表わしている。つまり当該の発話が表わす事態を発話者がインタラクションを通して表現していることを表わすのが、非指示的な ça の機能である。一方、là は先行文脈、もしくは当該の発話によって導入された発話状況を他の場合と対比的に提示し、当該の発話を発話状況に強く結びつける働きをしている。その結果として、様々なニュアンスを表わすことになる。発話末で用いられる là はもはやディスコースマーカーであると言える。

いずれにしろ、話し言葉において以上のような性格を持った là が高い頻度で用いられるのは、現代フランス語の話し言葉が持つ I モード的な性格と大いに関係している。

[引用作品]

Combes, Bruno (2018) *Parce que c'était toi....* J'ai lu 12146.
Gavalda, Anna (1999) *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*. J'ai lu 5933.
Giordanao, Raphaëlle (2017) *Le jour où les lions mangeront de la salade verte.* Eyrolles.
Haroche, Raphaël (2017) *Retourner à la mer*. folio 6520.
Les restos du cœur (2021) *13 à table 2022*. pocket 18272.
Papin, Line (2019) *Les os des filles*. Stock.
Roger, Marie-Sabine (2014) *Trente-six chandelles*. la brune au rouergue.
Rufin, Jean-Christophe (2019) *Les trois femmes du Consul*. folio 6929.
Ruter, Pascal (2017) *Barracuda for ever*. Le livre de poche 34876.
Tal Men, Sophie (2017) *Entre mes doigts coule le sable*. Le livre de poche 34944.
Trévidic, Marc (2016) *Ahlam*. Le livre de poche 34358.
Valognes, Aurélie (2017) *Minute, papillon*. Le livre de poche 34863

[参考文献]

春木　仁孝(2012)「フランス語における事態の認知方策について」　『言語文化研究』38：45-65.　大阪大学大学院言語文化研究科.
春木　仁孝(2014)「ÇA を主語とする発話と認知モード」　『フランス語学研究』48：63-84.　日本フランス語学会.

現代語版ルター聖書/現代語版チューリヒ聖書における gehen/kommen
—マタイによる福音書を対象に—

渡辺伸治

1. はじめに

本稿は，現代語版ルター聖書（以下 L と略記）と現代語版チューリヒ聖書（以下 Z と略記）のマタイによる福音書を対象に，その中でドイツ語移動動詞 gehen/kommen がどのように用いられているか，その様相を比較対照的に考察するものである。

本稿で考察対象とする gehen/kommen は，単一動詞 gehen/kommen と gehen/kommen を基礎動詞とする分離動詞である[1]。非分離動詞は対象としない。さらに以下の gehen/kommen は除外する[2]。

gehen：

１）次の分離動詞：angehen, aufgehen, dahingehen, verlorengehen, umgehen, niedergehen, untergehen

２）次の熟語，機能動詞：in Erfüllung gehen, zu Ende gehen

３）「物事が進む」という意味の単一動詞の gehen

kommen：

１）次の分離動詞：umkommen, übereinkommen, zugutekommen, zusammen- kommen, zuvorkommen

２）次の熟語，機能動詞：zur Welt kommen, in den Sinn kommen, zu Ende kommen, zu Fall kommen, zum Vorschein kommen, in Not kommen, ins Wanken kommen, in Versuchung kommen, in Ohren kommen, zu Verfolgung kommen,

３）時を表す単一動詞の kommen

４）名詞の Kommen

５）「失う」という意味の um~ kommen

本稿でのデータはオンラインで聖書を読むことができるサイト ERF Bibleserver を用いて収集したものである。このサイトでは独訳聖書は 12 の聖書を読むことができるが，聖書を選択しキーワードを入力，検索すると，当該のキーワードが含まれている節を見ることができる。その際，複数の聖書を選択した場合には，キーワードが含まれていない聖書であっても当該の節を並行して見ることができる。そのため，キーワードの語彙以外どのような語彙が用いられているか容易に確認することができる。例えば，以下の画像は ging で検索した場合の例であるが，第一の例では L, Z ともに単一動詞の ging が用いられている。一方，第二の例では L では単一動詞の ging が用いられているが，Z では verliess が用いられていることがわかる。

Lutherbibel 2017	Zürcher Bibel
Mt 9,7 Und er stand auf und **ging** heim.	Mt 9,7 Und der stand auf und **ging** nach Hause.

[1] 以下「単一動詞の」という限定が付かない「gehen/kommen」は単一動詞の gehen/kommen の他に基礎動詞が gehen/kommen の分離動詞も含むものとする。

[2] 基本的には本稿が対象とする gehen/kommen は具体的移動を表すことになる。

Lutherbibel 2017	Zürcher Bibel
Mt 13,1 An demselben Tage **ging** Jesus aus dem Hause und setzte sich an das Meer.	Mt 13,1 An jenem Tag verliess Jesus das Haus und setzte sich an den See.

本稿では以上概略した ERF Bibleserver を用いて次の要領でデータベースを作成した。まず，選択した L, Z のマタイによる福音書を対象に geh, ging, gegangen, komm, kam, käm をキーワードとして部分一致で検索し，ヒットした節を Excel 2019 上にコピーした。そこから gehabt 等 gehen/kommen とは無関係の語彙ならびに上記の gehen/kommen を削除しデータベースとした。

なお，ERF Bibleserver の L は 2017 年版，Z は 2007 年版をオンライン化したものであり，本稿のデータの収集，考察はこの限りでの収集，考察である。L, Z はともに初版は 16 世紀に遡ることができる聖書であり，現在に至るまでいくつかの版が存在する。L, Z において gehen/kommen の使用が歴史的にどのように変化してきたかの考察は興味深いテーマであるが，歴史的な考察は別稿でおこなうもとして本稿では考察しないものとする。

さて，本稿は L と Z の比較対照をおこなうものだが，比較対照の切り口としては様々なものがありうる。以下２章で gehen/kommen の出現数を見たあと，３章では出現頻度が高い単一動詞の gehen と hingehen の違いを，L と Z の違いと関連させながら考察する。４章では同一箇所において L, Z の gehen/kommen の使用がどのように異なるかという観点から，まず一方の聖書が gehen，他方の聖書が kommen の例を見る。続けて一方の聖書が gehen/kommen，他方の聖書が gehen/kommen 以外の例の中から，Z が kommen の場合に L で出現する頻度が相対的に高い treten の例を見る。最後に L が gehen の場合に Z で出現する頻度が相対的に高い ziehen と sich machen の例を見る。

2. gehen/kommen の出現数

本章では L, Z で用いられている gehen/kommen の出現数を分離前綴りのタイプとともに確認する。gehen/kommen を単一動詞と分離動詞に区別して出現数をカウントすると，主なものは以下の表のようになる[3]。

	総数	単一									
	gehen	gehen	hin	hinaus	hinein	weg	aus	weiter	ein	fort	davon
L	173	49	43	20	15	6	6	6	3	4	7
Z	148	71	11	12	12	11	5	4	5	3	
同	127	31	9	10	7	3	5	3	3		
	kommen	kommen	her	heraus	hinein	herab	zu	zurück	herein	herbei	hervor
L	156	138	5	3	1	2	1		1	2	
Z	153	134	3	3	3	1	2	3	1		2
同	128	107	2	3					1		

表１　gehen/kommen の出現数

表の一番左の列の「同」は当該の動詞が L と Z の同じ箇所で出現する数である。例えば，

[3] gehen の分離動詞には表以外にさらに L では vorüber が 4 例, heim が 2 例, entlang, herab, heraus, her, hinab, hinzu, umher , voran が 1 例ある。Z では voraus, vorüber, zu が 3 例, entlang, heim, her, hervor, mit が 1 例ある。kommen の分離動詞にはさらに L では heim, heran, herauf が 1 例ある。Z では entgegen が 1 例ある。

hingehen は L では 43 例あり Z では 11 例あるが，これは他方の聖書とは独立にカウントした数である。一方「同」は 9 例あるが，これは L と Z の同じ箇所で hingehen が用いられている例が 9 例あるということである。例えば次のような場合であり，このような場合がさらに 8 例あるということである。

(1) a. Mt 13,46 und da er eine kostbare Perle fand, ging er hin und verkaufte alles, was er hatte, und kaufte sie.[4]

b. Mt 13,46 Als er aber eine besonders kostbare Perle fand, ging er hin, verkaufte alles, was er hatte, und kaufte sie.

逆に言うと，L で hingehen が用いられている 34 (=43-9) 箇所，Z で hingehen が用いられている 2 (=11-9) 箇所は hingehen 以外の語彙が用いられているということになる。

次の列の「総数」は単一動詞の gehen/kommen と gehen/kommen を基礎動詞とする分離動詞の合計数である。その右の「単一」は単一動詞の gehen/kommen の数である。さらにその右は当該の分離動詞の分離前綴りとその数である。総数に関しては L の gehen が Z の gehen よりも若干多いほかは聖書間では大きな差は見られないといえよう。一方，総数に対する単一動詞の割合は kommen のほうが gehen よりも著しく高くなっている[5]。

3. 単一動詞の gehen/hingehen

前章では gehen/kommen の出現数を見たが，表 1 を細かく見ると単一動詞の gehen と hingehen の出現数は，L と Z とでは大きな違いが見られる。本章ではこの問題をいくつかの観点から考察する。

3.1. 単一動詞の gehen/hinngehen の相似性，互換性

表 1 によると，単一動詞 gehen は L が 49 例，Z が 71 例であり，Z のほうが多い。一方，hingehen は L が 43 例，Z が 11 例で L のほうが多い。これは，お互いに補完し合っているためと考えられる。すなわち，hingehen の hin は基本的には方向性を付加するだけの機能を持つため，hingehen は単一動詞の gehen と相似性，互換性が強く，お互いに補完し合っているということである。これは，L で hingehen を用いられている 43 例は Z では次の語彙が用いられているが，22 例で単一動詞の gehen が用いられていることにも反映している。

	hin-gehen	単一動詞 gehen	sich (auf)-machen	weg-gehen	voraus-gehen	heim-gehen	eilen	unterwegs sein
Z	9	22	4	3	2	1	1	1

表 2　L が hingehen の箇所での Z での語彙タイプと出現数

ただし，単一動詞の gehen は歩行に焦点がある用法（用法 1），出発を表す用法（用法 2），到着点が明示化され到着点への移動を表す用法（用法 3）の 3 つ[6]があるが，hingehen と相似性，互換性が強いのは用法 3 のみである。以下，より正確を期すために 22 例の単一動詞の gehen が用法 3 の gehen になっているかを確認しておこう。

[4] 以下，例文の Mt はマタイによる福音書を表し，数字は章，節を表す。例文の a は L，b は Z である。

[5] これは gehen に関しては hingehen の頻度が高く，kommen に関してはあとで簡単に見るようにギリシャ語原文の影響があるためと考えられる。

[6] 詳しくは渡辺 (2017)，Watanabe (2012) を参照されたい。

まず，22 例のうち到着点が明示化されている例は７例のみである。用法３は７例ということになり，この数だけを見ると hingehen と用法３の gehen の互換性はあまりないように見える。しかし，これは，定義上用法３の gehen は到着点が明示されていることが条件になっているからである。すなわち，Z では到着点が明示化されていない場合であっても，移動が到着点を指向した移動であると考えられる例が多く見られるのである。具体的に見ていこう。

到着点は明示化されていないが，移動が到着点を指向した移動であるということをできるだけ形式的に判断できるように，以下の b (= Z の例) の２例のように到着点は明示化されていないが，単一動詞の gehen の直後に到着点でおこなわれる行為の記述（weise, taten）がある用法を用法３‘とすると，

(2) a. Mt 18,15 Sündigt aber dein Bruder, so geh hin und weise ihn zurecht zwischen dir und ihm allein. Hört er auf dich, so hast du deinen Bruder gewonnen.

b. Mt 18,15 Wenn dein Bruder an dir schuldig wird, dann geh und weise ihn unter vier Augen zurecht. Hört er auf dich, so hast du deinen Bruder gewonnen.

(3) a. Mt 21,6 Die Jünger gingen hin und taten, wie ihnen Jesus befohlen hatte,

b. Mt 21,6 Die Jünger gingen und taten, was Jesus ihnen befohlen hatte,

Z ではこのような例が計 13 例ある。これに本来の用法３の７例を加えると Z では広義の用法３（用法３＋用法３‘）は 20 例あることになり，単一動詞の gehen 22 例のうち 20 例が広義の用法３ということになる。単一動詞の gehen の用法３のみを考慮するだけでは見られなかった hingehen との互換性が，広義の用法３に範囲を広げることにより確認できるのである。

3.2. 単一動詞の gehen の用法３/用法３‘

上では Z の単一動詞の gehen の用法３‘の出現数を L が hingehen の場合に限定して考察したが，以下では単一動詞の gehen 全体を対象に用法３と用法３‘の違いが L と Z の違いとどう関連するか見ておこう。関係する要素の出現数は以下のとおりである。

	用法3	用法3’	計
Z: 単一動詞のgehen (Lがhingehenの場合のみ)	7 (35%)	13 (65%)	20 (100%)
L: 単一動詞のgehen	23 (96%)	1 (4%)	24 (100%)
Z: 単一動詞のgehen	29 (63%)	17 (37%)	46 (100%)

表３　単一動詞の gehen の用法３と用法３‘の違いによる出現数

最初の行は３．１で挙げた数値であり表の最終行の「Z: 単一動詞の gehen」に含まれるが，この表からわかることは，L では用法３‘の例がほとんど見られず（１例のみ），Z では単一動詞の gehen 全体を対象とした場合でも用法３’が比較的多くみられることである。前節での議論と合わせて一言で言えば，到着点への移動を表す場合には，Z のほうが L よりも hin を省略する傾向があり，到着点を明示化しない傾向があるということになる。

なお，Z では，用法３と用法３‘の総計に対する用法３‘の数を比率で考えると，L が hingehen の場合に限定した場合の比率は単一動詞の gehen 全体を対象として場合の比率よりも高い (65%対 37%)。これは，Latzel (1979) が指摘する hin の代名詞的性質が要因になっていると考えられる。すなわち，hin 自体には指示性はないが，到着点が明示されていない場合であって

も文脈上到着点は既知である。従って，L で hingehen が用いられる環境では到着点を明示化する必要性は弱まる[7]が，同じ環境で用いられている Z の単一用法の gehen 場合も到着点を明示する必要性が弱まることになり，結果として用法３‘の比率が高くなるということである。

3.3. 単一動詞の gehen/hingehen と命令形

さて続けて，L, Z における広義の用法３の gehen と hingehen を命令形の観点から比較対照する。関係する語彙，形態の出現数は以下のものである。

	命令形	非命令形	計
L: hingehen	18 (42%)	25 (58%)	43 (100%)
L: 広義の用法3の単一動詞gehen	4 (17%)	20 (83%)	24 (100%)
Z: hingehen	2 (18%)	9 (82%)	11 (100%)
Z: 広義の用法3の単一動詞gehen	20 (43%)	26 (57%)	46 (100%)

表４　広義の用法３の gehen/hingehen の命令形/非命令形の出現数

特に Z の hingehen は絶対数が少ないため客観性の問題は残るが, 上の表にもとづく限りでは, L は hingehen のほうが単一動詞の gehen よりも命令形で用いられやすく，Z は広義の用法３の gehen のほうが hingehen よりも命令形で用いられやすいということになる。

なお，L の hingehen，Z の広義の用法３の単一動詞 gehen に関しては，以下の出現数が示すように，いずれも命令形のほうが非命令形よりも到着点が明示化されやすいという傾向もみられる。命令では到着点がどこかが特に重要な意味を持つからであろう。

	命令形	非命令形	計
L: hingehen 到着点表示	6 (67%)	3 (33%)	9 (100%)
L: hingehen 到着点非表示	12 (35%)	22 (65%)	34 (100%)
Z: 広義の用法3の単一動詞gehen　到着点表示	9 (53%)	8 (47%)	17 (100%)
Z: 広義の用法3の単一動詞gehen　到着点非表示	11 (38%)	18 (62%)	29 (100%)

表５（非）命令形と到着点（非）表示に関する出現数

3.4. hingehen と出発を表す語彙との関係

本章の最後に３．１で挙げた表２を別の観点から考察しておこう。すなわち, 表２を見ると, L で hingehen が用いられている箇所は，Z では７例で出発することを表す語彙（weggehen３例，sich (auf)machen　４例）が用いられているという問題である。

これらの例では，同一事態が L では到着点への移動として表され，Z では出発として表されていることになり，移動のプロセスにおいてどの部分が焦点化されているかが異なっている。例えば，L が hingehen で Z が weggehen, sich aufmachen の次の例である。

(4) a. Mt 26,44 Und er ließ sie und <u>ging</u> wieder <u>hin</u> und betete zum dritten Mal und redete abermals dieselben Worte.

b. Mt 26,44 Und er verliess sie, <u>ging</u> wieder <u>weg</u> und betete zum dritten Mal, wieder mit denselben Worten.

(5) a. Mt 18,12 Was meint ihr? Wenn ein Mensch hundert Schafe hätte und eins unter ihnen sich verirrte: lässt er nicht die neunundneunzig auf den Bergen,

[7] hingehen に関しては，L の 43 例では９例（21%）のみで到着点が明示化され，34 例（79%）では到着点が明示化されていない。Z の 11 例では到着点が明示化されている例はない。

geht hin und sucht das verirrte?

b. Mt 18,12 Was meint ihr? Wenn einer hundert Schafe hat, und es verirrt sich eines von ihnen, wird er nicht die neunundneunzig auf den Bergen zurücklassen und sich aufmachen, das verirrte zu suchen?

上で（広義の）用法３の単一動詞の gehen と hingehen の相似性，互換性について見たが，hingehen と出発を表す語彙にもある程度の互換性が見られことになる。もっとも相似性に関しては hingehen と出発を表す語彙とでは移動のどの部分を焦点化しているかが異なり，相似性は弱くなっているといえよう。

4. L と Z の同一の箇所に出現する gehen/kommen とその他の語彙

4.1. 一方の聖書が gehen，他方の聖書が kommen の場合

２章でみたように gehen は同一箇所で L, Z ともに gehen が用いられている箇所は 127 例ある[8]。一方，kommen は同一箇所で L, Z ともに kommen が用いらている箇所は 128 例ある。gehen/kommen 合わせると，L, Z は 250 箇所で同一の gehen/kommen が用いられていることになる。これに対し，同一箇所において一方の聖書が gehen，他方の聖書が kommen の例は 15 例のみである。内訳は L が kommen，Z が gehen が 10 例，L が gehen, Z が kommen が５例である。同一の gehen/kommen が用いられている 250 箇所と比較すると，15 例は数少ないが, このタイプは視点[9]の取り方が逆になっている点で特異な例である。以下, まず L が kommen, Z が gehen の 10 例のうち４例を挙げる。

(6) a. Mt 9,28 Als er aber ins Haus kam, traten die Blinden zu ihm. Und Jesus sprach zu ihnen: Glaubt ihr, dass ich das tun kann? Da sprachen sie zu ihm: Ja, Herr.

b. Mt 9,28 Als er ins Haus hineinging, traten die Blinden auf ihn zu, und Jesus sagt zu ihnen: Glaubt ihr, dass ich dies tun kann? Sie sagen zu ihm: Ja, Herr.

(7) a. Mt 13,36 Da ließ Jesus das Volk gehen und kam heim. Und seine Jünger traten zu ihm und sprachen: Deute uns das Gleichnis vom Unkraut auf dem Acker.

b. Mt 13,36 Dann liess er die Leute gehen und ging ins Haus. Und seine Jünger traten zu ihm und sagten: Erkläre uns das Gleichnis vom Unkraut im Acker!

(8) a. Mt 14,29 Und er sprach: Komm her! Und Petrus stieg aus dem Boot und ging auf dem Wasser und kam auf Jesus zu.

b. Mt 14,29 Er sprach: Komm! Da stieg Petrus aus dem Boot, und er konnte auf dem Wasser gehen und ging auf Jesus zu.

(9) a. Mt 14,34 Und sie fuhren hinüber und kamen ans Land, nach Genezareth.

b. Mt 14,34 Und sie fuhren über den See und gingen in Gennesaret an Land.

続けて L が gehen，Z が kommen の例を２例挙げる。

---

[8] 単一動詞か分離動詞かの違いは区別せず，一方が単一動詞の gehen，他方が hingehen のような分離動詞の場合も含めていることに注意されたい。kommen も同様である。

[9] 視点の問題に関しては本稿では考察しない。詳しくは渡辺（2016）を参照されたい。

(10) a. Mt 8,5 Als aber Jesus nach Kapernaum hineinging, trat ein Hauptmann zu ihm; der bat ihn

b. Mt 8,5 Als er aber nach Kafarnaum kam, trat ein Hauptmann an ihn heran und bat ihn:

(11) a. Mt 10,11 Wenn ihr aber in eine Stadt oder ein Dorf geht, da erkundigt euch, ob jemand darin ist, der es wert ist; bei dem bleibt, bis ihr weiterzieht.

b. Mt 10,11 Kommt ihr aber in eine Stadt oder in ein Dorf, dann fragt nach, wer da würdig ist; dort bleibt, bis ihr weiterzieht.

以上，同一箇所で一方の聖書が gehen，他方の聖書が kommen の例を見たが，L が gehen, Z が kommen の例は 5 例だが，Z が gehen，L が kommen の例は 10 例ある。これらの例のみにもとづくと L のほうが到着点側の視点を取りやすいことになるが，例が少なく判断がむずかしい。聖書の他の部分も参照しデータ数を増やすことでこの問題はさらに考察していきたい。

また，本稿ではギリシャ語原文での原語の問題を考慮していないが，ここで本章の問題設定と関連する点に関し少しだけ触れることにする。

原文の影響を受けない翻訳はなく，L, Z でも原文の影響は受けている[10]と考えられるが，聖書関連サイトである Bible Hub のギリシャ語原文のインターリニア聖書を参照すると，L の単一動詞の kommen 138 例のギリシャ語原語は 100 例が ἔρχομαι であり，Z の単一動詞の kommen 134 例のギリシャ語原語は 87 例が ἔρχομαι である[11]。いずれにせよ単一動詞の kommen と ἔρχομαι の相関関係は強い[12]と考えられるが, この例のみにもとづくと L のほうが Z よりも相関関係が若干強いということになろう。また，L が kommen で Z が gehen の 10 例の原語は 9 例が ἔρχομαι であるが, Z が kommen で L が gehen の 5 例の原語はすべて ἔρχομαι ではない。この点でも相関関係の相違がみられるが，データが少ないという問題は残る。さらに，この問題は L, Z から原語の語彙を見るのではなく，ギリシャ語原文の ἔρχομαι が L, Z ではどのように訳されているのかという問題を考える必要もある。ここでは問題の指摘だけに留め，ギリシャ語原語との関係の考察はさらなる課題としたい。

4.2. 一方の聖書が gehen/kommen，他方の聖書が gehen/komme 以外の場合

同一箇所において一方の聖書が gehen/kommen，他方の聖書が gehen/komme 以外の箇所の数は以下の表のとおりである。このうち B, C の場合は gehen/kommen 以外の語彙が多岐にわたるので以下考察せず，比較的頻度が高い特定の語彙が見られる A, D の場合のみ考察する。

A	Lがgehen，Zがgehen/kommen以外	41
B	Lがkommen，Zがgehen/kommen以外	18
C	Zがgehen，Lがgehen/kommen以外	11
D	Zがkommen，Lがgehen/kommen以外	20

一方の聖書が gehen/kommen，他方の聖書が gehen/komme 以外の箇所数

[10] さらに言えば，L と Z がどのようにどの程度お互いに影響を受けているかという問題もあろう。

[11] Bible Hub のインターリニア聖書は原語に英語の訳語，ストロング番号などの情報が振られているが，それを参照しながら gehen/kommen の原語を確認しカウントした。

[12] ２章で kommen は単一動詞の出現率が gehen よりも著しく高いことをみたが，これは単一動詞の kommen と相関関係が強い原語の ἔρχομαι の出現数の高さによると考えられる。

4.2.1. Z が kommen，L が treten の場合

まず，Z が kommen，L が gehen/kommen 以外の箇所である。この箇所は 20 例あるが，20 例中 15 例で Z の kommen が L では treten[13]である。例えば以下の 2 例である。

(12) a. Mt 15,12 Da traten die Jünger hinzu und sprachen zu ihm: Weißt du auch, dass die Pharisäer an dem Wort Anstoß nahmen, als sie es hörten?

b. Mt 15,12 Da kommen seine Jünger zu ihm und sagen: Weisst du, dass die Pharisäer Anstoss genommen haben, als sie dieses Wort hörten?

(13) a. Mt 22,23 An demselben Tage traten Sadduzäer zu ihm, die sagen, es gebe keine Auferstehung, und fragten ihn

b. Mt 22,23 Am selben Tag kamen Sadduzäer zu ihm, die behaupten, es gebe keine Auferstehung, und sie fragten ihn:

L が kommen, Z が treten の箇所は 1 例のみであるから，L では treten が用いられやすいといえよう。

また，これら 15 例のギリシャ語原語はすべて προσέρχομαι であるが，これは上で見た単一動詞の kommen と相関関係があると考えられる ἔρχομαι に接頭辞 προσ が付加された語彙である。ここでの例に限定する限りでは，L はギリシャ語原語の違いにより訳語を kommen と treten に使い分けているが，Z は使い分けていないことになる[14]。

4.2.2. L が gehen, Z が ziehen/sich machen の場合

L が gehen で Z が gehen/kommen 以外の箇所は 41 例あるが，41 例の中でもっとも頻度が高い語彙は 12 例の ziehen[15]である。例えば以下の 2 例である。

(14) a. Mt 9,9 Und als Jesus von dort wegging, sah er einen Menschen am Zoll sitzen, der hieß Matthäus; und er sprach zu ihm: Folge mir! Und er stand auf und folgte ihm.

b. Mt 9,9 Und als Jesus von dort weiterzog, sah er einen Mann, der Matthäus hiess, am Zoll sitzen. Und er sagt zu ihm: Folge mir! Und der stand auf und folgte ihm.

(15) a. Mt 11,9 Oder was zu sehen seid ihr hinausgegangen? Einen Propheten? Ja, ich sage euch: Er ist mehr als ein Prophet.

b. Mt 11,9 Oder was habt ihr zu sehen gehofft, als ihr hinauszogt? Einen Propheten? Ja, ich sage euch, mehr als einen Propheten habt ihr gesehen!

L が ziehen, Z が gehen の例は 3 例のみであるから，Z では ziehen が用いられやすいといえよう。

また，L が gehen，Z が gehen/kommen 以外の箇所 41 例のうち，7 例で L の gehen が Z で

---

[13] treten の場合も treten は基礎動詞が treten の分離動詞も含むものとする。15 例の内訳は単一動詞の treten が 11 例，hinzutreten が 2 例，herzutreten, herantreten が 1 例である。

[14] ギリシャ語原文については上でも触れたが，この問題に関しても示唆に留め，さらなる考察は今後の課題としたい。

[15] ziehen の場合も ziehen は基礎動詞が ziehen の分離動詞も含むものとする。12 例の内訳は hinausziehen が 5 例，weiterziehen が 4 例，ausziehen, herziehen, vorbeiziehen が 1 例である。

は sich (auf)machen である[16]。例えば以下の２例である。

(16) a. Mt 13,25 Als aber die Leute schliefen, kam sein Feind und säte Unkraut zwischen den Weizen und ging davon.

b. Mt 13,25 Doch während die Leute schliefen, kam sein Feind, säte Unkraut unter den Weizen und machte sich davon.

(17) a. Mt 11,7 Als sie fortgingen, fing Jesus an, zu dem Volk über Johannes zu reden: Was zu sehen seid ihr hinausgegangen in die Wüste? Ein Schilfrohr, das vom Wind bewegt wird?

b. Mt 11,7 Als diese sich wieder auf den Weg machten, begann Jesus zu den Leuten über Johannes zu reden: Was habt ihr zu sehen gehofft, als ihr in die Wüste hinauszogt? Ein Schilfrohr, das im Wind schwankt?

L で sich (auf) machen で Z が gehen の例はないので, Z は sich (auf)machen が用いられやすいといえよう。

5. おわりに

本稿では現代語版ルター聖書，現代語版チューリヒ聖書に現れる gehen/kommen を比較対照的に考察し，L と Z におけるいくつかの違いを見た。本稿で用いた L, Z はオンラインの現代語版訳であったが，１章でも触れたようにそれぞれの聖書の gehen/kommen の使用が歴史的にどのように変化してきたかの考察は興味深い問題であり今後の課題としたい。

また，本稿ではマタイの福音書のみを対象としたが，例が少ない場合もあり今後は他の福音書等に対象を広げて考察する必要がある。さらに上でも触れたが本稿の問題設定からはギリシャ語原文との比較対照も不可欠である。προσέρχομαι と ἔρχομαι の訳し方を見ると L と Z とでは訳語の選択の仕方が異なるようにも見える。さまざまな問題が山積みの感はあるが，これらの問題の考察は今後の課題として本稿をひとまず終えることにしよう。

参考ウェッブサイト

ERF Bibleserver: https://www.bibleserver.com/

Bible Hub: https://biblehub.com/

参考文献

角谷善朗 (2002):「旧約の sᵉne と新約の βάτος のドイツ語訳について —Luther と Zwingli の例証に基いて」『教養論叢』116.（慶應義塾大学法学研究会）pp. 1-32.

角谷善朗 (2016):「ルカによる福音書 15 章における三つの譬えについて: Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて(1)」『教養論叢』137.（慶應義塾大学法学研究会）pp. 1-25.

角谷善朗 (2017):「ルカによる福音書 15 章における三つの譬えについて: Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて(2)」『教養論叢』138.（慶應義塾大学法学研究会）pp. 1-26.

角谷善朗 (2018):「ルカによる福音書 15 章における三つの譬えについて: Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書

[16] このうち３例は，３．１で見た L が hingehen で Z が sich aufmachen の３例である。

に基いて(3)」『教養論叢』139.（慶應義塾大学法学研究会）pp. 1-23.
角谷善朗（2019):「ルカによる福音書 15 章における三つの譬えについて: Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて(4)」『教養論叢』140.（慶應義塾大学法学研究会）pp. 1-21.
金山正道（2006):「ドイツ共通語の成立　—中世からルターまで—」『福岡大学研究部論集』A.人文科学編 5/5. pp. 81-106.
河崎靖（2007):「ルターと初期新高ドイツ語」『ドイツ文學研究』52. pp. 85-104.
河崎靖（2011):『ドイツ語で読む『聖書』 —ルター，ボンヘッファー等のドイツ語に学ぶ—』現代書館
塩谷饒（1983):『ルター聖書 抜粋・訳注』大学書林
塩谷饒（1987):『ルター聖書のドイツ語』クロノス
多田哲（2019):「ルターとドイツ語—ルター訳聖書のドイツ語とその新高ドイツ語成立への影響」『ルター研究』16. pp. 163-189.
辻学（2019):「ルター『九月聖書』の書誌学的考察 —第 1 刷の本文をめぐって—」日本新約学会編『青野太潮先生献呈論文集 イエスから初期キリスト教へ —新約思想とその展開』pp. 389-402.
吉田新（2017):「聖書翻訳の過去・現在・未来 ルター訳聖書 2017 年改訂版について」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』35. pp. 43-49.
渡辺伸治（2016):「go/come のダイクシス用法と非ダイクシス用法 —具体的用法の場合—」『言語文化研究』42. pp. 219-239. 大阪大学言語文化研究科.
渡辺伸治（2017):「ヨーロッパ言語の中の英語 —ドイツ語の視点から—」今尾康裕他（編）『英語教育徹底リフレッシュ』pp. 242-248. 開拓社
Di Meola, C. (1994): *„kommen“ und „gehen“. Eine kognitiv-linguistische Untersuchung der Polysemie deiktischer Bewegungsverben*. LA 325. Tübingen: Niemeyer.
Latzel, S. (1979): *Der Gebrauch von „hin“ und „her“ im heutigen Deutsch.* Goethe-Institut.
Watanabe, S. (2002). Zur Deixis von *kommen*, *bringen* und *mitbringen*. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik 30/3*, 342-355.
Watanabe, S. (2012). Zur Deixis von *gehen*. In: F. Gruzca, et al. (Eds.) *Akten des XII. internationalen Germanisitenkongresses Warschau 2010,* Vol. 15. pp.203-208. Frankfurt a. M: Peter Lang.

執筆者紹介（掲載順）

王　周明（WANG, Zhouming）
言語文化学専攻　コミュニケーション論講座
高橋克欣（TAKAHASHI, Katsuyoshi）
言語文化学専攻　言語認知科学講座
瀧田恵巳（TAKITA, Emi）
言語文化学専攻　コミュニケーション論講座
田村幸誠（TAMURA, Yukishige）
言語文化学専攻　言語認知科学講座
松浦幸祐（MATSUURA, Kosuke）
日本語日本文化教育センター
春木仁孝（HARUKI, Yoshitaka）
名誉教授
渡辺伸治（WATANABE Shinji）
言語文化学専攻　コミュニケーション論講座

（2022 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2021

時空と認知の言語学XI

2022 年　5 月 20 日　発行

編集発行者
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻